



研究奨励事業  
研究報告

## 松本清張、未完の仕事

——《荒木光子の戦中・戦後》

大阪大学教授 北原 恵

北九州市立  
松本清張記念館

## 松本清張、未完の仕事——<<荒木光子の戦中・戦後>>

### 目次

■ 論文 荒木光子の戦中・戦後——「マッカーサー元帥レポート」を中心に	
第1章 はじめに：「荒木光子」とは誰か？	2
(1) 荒木光子への注目と研究状況・課題	
(2) 松本清張はどこまで知っていたのか？	
2-1: 文藝春秋編集部の記事から	
2-2: 松本清張記念館での調査から	
2-3: 村上ノート（文芸春秋編集者のメモ）から	
第2章 戦前・戦中の荒木光子：1902年～1945年	7
(1) 出生から結婚、1902～1921年	
(2) 2回の海外生活：1923～26年（独英仏米）、1938-39年（独・伊）	
(3) 靖国丸での渡欧の旅：1938年、野上弥生子日記から	
(4) ドイツ滞在：1938-39年	
(5) 荒木光太郎の日独文化交流活動	
(6) 「日独伊婦人会」の活動	
第3章 荒木光子の戦後：1945年～1960年代	17
(1) 『マッカーサー元帥レポート』編纂の歴史と組織	
(2) 『マッカーサー元帥レポート』への荒木光子の関与①——G-2スタッフの手記から	
(3) 『マッカーサー元帥レポート』への荒木光子の関与②——プランゲ・ペーパーズから	
3-1: 名簿	
3-2: プランゲとの私信	
(4) 『マッカーサー元帥レポート』への荒木光子の関与③——NARAI 調査から	
4-1: 校正時の指示メモ	
4-2: アルバム『日本の戦争画コレクション』の序文	
第4章 終章：荒木光子のその後	27
(1) 占領終了後の荒木光子	
(2) 本プロジェクトのまとめ	
(3) おわりに：再び、「御前会議」の謎へ	
■ 図 版 (fig. 1～12)	31
■ 資料 I～V	37
■ マッカーサー元帥レポートに掲載された「戦争画」	45
■ 荒木光子・荒木光太郎年譜	56
■ 荒木光子関係 主要参考文献一覧	59

## 第1章 はじめに：「荒木光子」とは誰か？

## (1) 荒木光子への注目と研究状況・課題

荒木光子（あらかき・みつこ）とは、松本清張が、小説のテーマとして生前、最後に取り組もうとしていた日本再軍備計画に登場する日本人女性の名前である。清張は、再軍備を進める旧日本軍参謀や占領軍と深いつながりのあった荒木光子や当時の歴史を調べ、執筆を開始することを決めたが、その直後の1992年4月に脳溢血で倒れ、8月に逝去。この仕事は未完のままに終わった。荒木光子（1902-1986）については未だにわからないことが多く、戦中・占領期の行動は謎に包まれている。

そのため、筆者は第20回松本清張研究奨励事業の助成を受けて、荒木光子の1930年代から50年代の活動を調査し、松本清張の未完に終わった仕事の一端を明らかにするため、「松本清張、未完の仕事——荒木光子の戦後史」の調査研究を行った。本稿では、①まず本プロジェクトの問題意識と関係する先行研究の状況、そして松本清張の残した関係資料の調査報告を行い、②荒木光子の出生から前半生を戦前/戦後に分けて述べる。③特に占領期の『マッカーサー元帥レポート』への関与については、2018年に行ったアメリカ公文書館（NARAI）やメリーランド大学のプランゲ・ペーパーズなどでの調査をもとに、荒木光子の活動について明らかにする。

私が「荒木光子」の名前を初めて知ったのは、2006年頃、『マッカーサー元帥レポート』に掲載された日本の戦争画に関心を持ち、調査していた時のことだった。

占領期にGHQ参謀第2部（G-2）の歴史課が編纂した『マッカーサー元帥レポート The Reports of General MacArthur』（全4冊）には、アジア・太平洋戦争期に作戦地図【fig.1】などのほか、日本人画家によって描かれた作戦記録画などの戦争画が、大量に掲載されていた。全4冊は、米軍から見た作戦・戦闘・占領の記録（第1巻パート1&2）と、日本軍側から見た記録の第2巻パート1&2から構成されているが、後者の2冊には、油彩画、日本画、スケッチなど合計40点の絵画が載せられていた<sup>1</sup>。そのうち半数以上を占めるのが、戦後GHQによって接収され、その後「無期限貸与」という形で日本に返還された日本人画家が描いた作戦記録画である。それらのなかには、前線を描いた小磯良平の「娘子関を征く」（第1回芸術院賞）や、藤田嗣治「十二月八日の真珠湾」、宮本三郎「本間ウエンライト会見図」、中村研一「コタ・バル」、佐藤敬「ニューギニア戦線——密林の死闘」、橋本八百二「サイパン島大津部隊の奮戦」、清水登之「工兵隊架橋作業」、特攻隊を描いた岩田専太郎の日本画「特攻隊内地基地を進発す（二）」、戦争末期の東京空襲の様子を描いた鈴木誠「皇土防衛の軍民防空陣」など、今日、戦争記録画の代表作として最もよく知られている絵画が含まれていた<sup>2</sup>。

それだけではない。特に私が気になったのは、寺内萬治郎の油彩画「御前会議」や、戦後描かれた絵画や前線を描いたスケッチの存在だった。たとえば敗戦直後の靖国神社、皇居前広場で土下座する人々や軍旗奉焼式の様子など、終戦間際か戦後直後に起こった出来事は、当然ながら戦後にしか描くことができない光景だ<sup>3</sup>。制作年不明の水彩画や、「昭和二十三年三月十七日」という戦後の日付を入れた絵も10点ある。これらの制作年

<sup>1</sup> 当報告書の巻末にまとめて掲載した。各絵画の画像・基本情報についてはそちらを参照されたい。

<sup>2</sup> 鈴木誠「皇土防衛の軍民防空陣」や「戦争画」の概念については、北原恵「戦争画」概念再考——「空襲」は銃後の画像か」坪井秀人編『東アジアの中の戦後日本』（戦後日本を読みかえる 第5巻）、2018年。『マッカーサー元帥レポート』に掲載された戦争画については、注4を参照。

<sup>3</sup> 巻末掲載の戦争画のうち、戦後に描かれたものについては「制作年」の箇所を赤字で表記した。

のよくわからない絵画群の大半は、海軍を英雄視したワシントン政府の公式の戦史に対抗して、南西太平洋方面の闘いを重視しマッカーサーの功績を称えることを目的に編纂された『マッカーサー元帥レポート』の編纂者が、収集した作戦記録画だけでは足りないため追加したものだと思われる。何よりも、ポツダム宣言受諾を決めたと言われる1945年8月9日[実際は10日]の御前会議を描いた油彩画が、アメリカ軍の戦史報告書に掲載されていることに衝撃を受けた。

いったい誰が、どのような意図で、「御前会議」の絵を描かせたのか？ どのようにして日本人画家による戦争画を集め、使用したのか？ その調査の過程でキーパーソンとして浮上したのが、「荒木光子」だったのである。

荒木光子は、1947年夏頃から、『マッカーサー元帥レポート』の日本側のチーフ・エディターを務めた夫の荒木光太郎とともに編纂に携わり、絵画やビジュアル史料の収集・製作の中心を担うことになった。G-2 歴史課のオフィスが日比谷の日本郵船ビル3階にあったことから、光子が「郵船ビルの淀君」と呼ばれ、絶大な権力を持っていたことは、当時の複数のG-2関係者らが証言している。それらの証言や史資料を繋ぎ合わせて、荒木光子の重要性がおぼろげながら見えてきた。

しかし、15年程前、私が調査を行っていた頃は、美術史研究においては、河田明久や平瀬礼太らによって「戦争画」の歴史を占領期にまで拡大して論じる先駆的な取り組みが始まり、占領期の公文書がようやく調査の対象となり始めた時期である。だが、アメリカ公文書館所蔵の占領期の史資料の扱いは、美術史研究の範疇を越え、その後大きな発展は見られず、これまで『マッカーサー元帥レポート』や参謀第二部(G-2)の活動について言及されることは全くなかった。一方、占領期研究においても、『マッカーサー元帥レポート』は基本文献のひとつであるが、そのなかに掲載された戦争画や視覚資料の編纂過程について注目されることは、当時はなかった。

2008年春、筆者は日本国内で収集できる文献資料や画廊の関係者への聞き取りなどを行いまとめた調査報告を、論文「〈御前会議〉の表象——『マッカーサー元帥レポート』と戦争画」として発表した<sup>4</sup>。だが、日本国内での調査には限界があったので、『マッカーサー元帥レポート』に掲載された戦争画などビジュアル資料を求めて、2008年3月、アメリカ国立公文書館(NARAH)やブランゲ文庫などに調査に出かけた。そして、荒木光子の名前がG-2のスタッフとして記された名簿や、占領期にGHQによって収集された日本の戦争画と荒木光子の密接な関係を証明するアルバム『日本の戦争画コレクション(Collection of Japanese War Paintings)』を発見することができたが<sup>5</sup>、さらなる渡米調査が必要であるにもかかわらず果たせないまま、10年以上が経過した。その後、松本清張が荒木光子に関心を持ち、亡くなる直前に彼女の登場する小説の執筆を準備していたことを偶然知り、松本清張が残した資料を調査したいと考えていた。

一方、その間に、『マッカーサー元帥レポート』や、G-2 歴史課、荒木光子に関する研究状況も少し進展を見せてきた。現在では、国会図書館のレサーチ・ナビの項目、「GHQ/FEC, Military History Section, The Reports of General MacArthur」が、『マッカーサー元帥レポート』について、基本情報をコンパクトにまとめており入門的には大変役に立つ。また、『マッカーサー元帥レポート』の戦況地図や戦後の日本の状況を捉えた写真、戦争画等を所収した図版集「Illustrations of Reports of General MacArthur 5ボックス」も、国立国会図書館デジタルコレクションで簡単に閲覧することができる。

荒木光子やG-2 歴史課に関心を持つ人々も現れ始め、いくつかの研究も登場した。名古屋大学がまとめた『荒木光太郎文書解説目録』(2014年/2018年増補改訂)は、荒木光子の夫・荒木光太郎の蔵書に関する調査報告であるが、目録を解説した牧野邦昭と小堀聡の論考は、光太郎の履歴を実証的かつ詳細に記していて、光子の履歴を知る手がかりを得るうえで最も信頼できる資料のひとつとなっている<sup>6</sup>。

荒木光子に注目し紙幅を多く割いているのは、2013年に講談社から出版された阿羅健一の『秘録・日本国防軍クーデター計画』である<sup>7</sup>。「松本清張の最後の仕事「服部機関」(第1章)から書き始めた同書は、松本

<sup>4</sup> 北原恵「〈御前会議〉の表象——『マッカーサー元帥レポート』と戦争画」『甲南大学紀要. 文学編』151巻、2008年3月。以下で公開 <https://core.ac.uk/download/pdf/148077433.pdf>

<sup>5</sup> 北原恵「『マッカーサー元帥レポート』と戦争画、その後——アラキミツコの戦史編纂への関与」『インパクション』167号、2009年2月。

<sup>6</sup> 名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター情報資料室『荒木光太郎文書解説目録』2014年。2018年には増補改訂版が出され、ネットで公開されている。同書所収の以下の論文を参考。牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」；小堀聡「荒木光太郎文書解説(増補改訂版)」。前者をもとにした、牧野邦昭「荒木光太郎——ネットワークを通じた経済学の制度化」(八木紀一郎・柳田芳伸編『埋もれし近代日本の経済学者たち』昭和堂、2018年)も参照。これらの荒木光太郎関係の資料に登場する光子の描写からも、光子の姿の断片がうかがえる。

<sup>7</sup> 阿羅健一『秘録・日本国防軍クーデター計画』講談社、2013年。阿羅健一は、アマゾンの著者略歴によれば、評論

清張の視点とは真逆の関心の在り方である。荒木光子に関しては、「GHQを手玉にとった女帝」(第4章)と、「女スパイ・荒木光子の諜報活動」(第7章)の2章分を当てている。関係者の聞き取りも含めて情報量は多いのだが、出典や根拠が明確でなく、例えば、1902年に生まれた荒木光子の生年を「明治三十七年」(1904年)と記載するなど、史実の記載に疑問が残る。同書はアマゾンの購入サイトで、「毀誉褒貶のある軍人、服部卓四郎と辻政信の人生を縦糸に、日本人女スパイやウィロビーなどGHQの魑魅魍魎たちが織りなす活劇は、小説の遙か上を行くほどページ・ターニング!」と紹介されているように、読み物としてスキャンダラスな興味をひく。そのため、ネット上に急に多く見られるようになった「荒木光子」に関する情報は、阿羅健一の『秘録・日本国防軍クーデター計画』から採ったものが多く見られる。

これらのネット上の言説に特徴的なのは、チャールズ・ウィロビーと荒木光子の関係のスキャンダラスな語りであり、ウィロビーとの恋愛関係に収斂するジェンダー観ゆえに、荒木光子が副次的な存在とされ、彼女の果たした役割が正確に見えてこないことである。このような女性蔑視のジェンダー観は、現在始まったわけではなく、占領期に出版された手記や証言にも共通する。たとえば、1952年に理論社から出版され、占領体制を批判した板垣進助の『この自由党! 後篇: 祖国なき政治』は、荒木光子に関して詳しく書いている。だが、光子とウィロビーとの関係について、「当年とって満五十才、ウィロビーとの噂の当時でも四十七、八なのであるから、もう姥桜ともいえないような、更年期女性のどこがよかったのだろうと、他人の痴気を気に病む連中もいたようであるが...」<sup>8</sup>などと述べ、ミソジニーと一体化した政治批判となっている。右も左もこのような女性差別的なジェンダー観ゆえに、荒木光子に関する実証的研究と正当な評価を置き去りにしてきたと言える。

『マッカーサー元帥レポート』編纂の経緯や歴史的な位置づけについては、近代日本軍事史の研究者である田中宏巳の『消されたマッカーサーの戦い——日本人に刷り込まれた「太平洋戦争史」』が参考になる<sup>9</sup>。そもそもなぜ、『マッカーサー元帥レポート』が必要とされたのか? 田中によれば、ワシントン主導の太平洋戦争史は、日米海軍の死闘に焦点を絞り海軍を英雄化する一方、マッカーサーが活躍した島嶼戦は、「南西太平洋の片隅で、日米陸軍がこそこそ戦ったかのようなイメージに仕立てられた」<sup>10</sup>という。「中部太平洋の反攻戦を主軸にした太平洋戦争史に対して、島嶼戦を戦ったマッカーサーの部下たちがどのように対応したかに触れ、その後の日本における太平洋戦争史編纂の動きを概観」した同書では、『マッカーサー元帥レポート』刊行までの経緯や、G-2歴史課の構成、分析を行っている。荒木光子に関しては、カラー図版を多用したビジュアル的に贅沢な完成本が、彼女が「わがままを通した」ゆえに出来上がったと述べるだけで、詳述はしていない。

その他にもチャールズ・ウィロビーの新版回顧記『GHQ知られざる諜報戦』が出版され<sup>11</sup>、加藤哲郎がゾルゲ研究のなかで荒木光子に注目するなど<sup>12</sup>、複数のアプローチが見られるようになった。なかでも20世紀メディア研究所による占領期研究誌『Intelligence インテリジェンス』は重要である。このようにこの10年でG-2歴史課や『マッカーサー元帥レポート』など、荒木光子の周辺に関する研究は進んだが、荒木光子の果たした役割や行動については断片的であり、同戦記に掲載された戦争画そのものに注目した研究は依然として存在しない。

そこで、本プロジェクトでは、「先行研究のほとんどない荒木光子の1930～50年代の活動に焦点を当て、彼女に関する史資料を収集・分析することによって、占領軍や旧日本軍参謀らとのつながりを具体的に明らかにする」ことを目指した。収集できた資料はまだ断片的で限定的だが、本稿では整理して論述する。

家・近現代史研究家。「百人斬り訴訟を支援する会」会長や「中国の抗日記念館の不当な写真の撤去を求める国民の会」会長を務める。また、「主権回復を目指す会」や「田母神論文と自衛官の名誉を考える会」の顧問も務める。

<sup>8</sup> 板垣進助『この自由党! 後篇: 祖国なき政治』理論社、1952年。同書は、『この自由党』(幻の地下帝国シリーズ1・2)晩声社、1976として復刻。p.172。

<sup>9</sup> 田中宏巳『消されたマッカーサーの戦い——日本人に刷り込まれた「太平洋戦争史」』吉川弘文館、2014年。

<sup>10</sup> 同前、p.10。

<sup>11</sup> C.A.ウィロビー(延楨監修、平塚証緒編)『GHQ知られざる諜報戦——新版・ウィロビー回顧録』山川出版、2011年。(初出は、1973年、番町書房)

<sup>12</sup> 加藤哲郎「情報戦のなかの「亡命」知識人——国崎定洞から崎村茂樹まで」『Intelligence インテリジェンス』9号(特集 対ソ・対ロのインテリジェンス活動)、20世紀メディア研究所、2007年; 加藤哲郎『ゾルゲ事件——覆された神話』平凡社新書、2014年。

## (2) 松本清張はどこまで知っていたのか？

### 2-1: 文藝春秋編集部の記事から

松本清張が荒木光子に関心を持ち、生前、最後の小説のなかに登場させるつもりであったことは、文藝春秋編集部が書いた記事「松本清張 最後のテーマは辻政信」に詳しい。これは、松本清張没後10年目に「秘話開封」として発表され、当時の日記や取材班の記録、諸資料によって、企画・取材の経緯や清張の意図を明らかにしようとしたものである。『文藝春秋』誌上で連載する予定だった清張の新企画は、「戦後史の謎とされる事件を改めて解明しようという意欲的なもの」だった<sup>13</sup>。登場するのは、辻政信を中心に、GHQのG-2で諜報・謀略機関として暗躍したと言われる服部卓四郎機関や荒木光子らである。

1990年11月7日に、松本清張は文藝春秋の編集長やデスクにこの企画について相談した。同年12月29日の清張の日記によれば、彼が特に荒木光子に関心を持ったのは、阿部真之助の「辻政信」小論だったようだ。――「阿部真之助の「辻政信」小論に、「辻は、ウィロビーと特別な仲の荒木光子に頼んでなにかと便利をはかってもらっていた」との記事がある。荒木光子とは何者か」。編集部の注によれば、阿部真之助は次のように荒木光子に言及している。

「そのころウィロビー少将の郵船ビルの事務所では、マ元帥戦史編纂の事業がすすんでおり日本側の資料提供係りとして十名内外の旧軍人が抱えられていた。その中でウ少将が最も信頼した日本人は女では荒木光子、男では服部卓四郎だった。」<sup>14</sup>

この阿部真之助の文章が載った『現代日本人物論』は、1952年9月に出版されており、清張は1990年に初めて知ったのではなく、もっと古くから読んでいた可能性もある。なぜなら、1960年11月に『婦人公論』で発表した「占領「鹿鳴館」の女たち」にも、荒木光子のことが言及されているからである<sup>15</sup>。

翌1991年に入ると、編集部では取材班を作って取材を開始した。メインは辻政信である。一方、松本清張は荒木光子について独自に取材していたようである。日記によれば、1991年9月11日、荒木光子の甥（弁護士）が清張の家を訪れ、荒木光太郎の来歴や、夫妻が戦前、「ナチス・ドイツの情勢を探るため」ドイツに滞在したこと（スイスのOSSアレン・ダレスの依頼の可能性を示唆）、敗戦後、荒木夫妻の家は米占領軍に接収されたことなどを語ったという<sup>16</sup>。

同年9月17日には、清張は翌年4月から『文藝春秋』での連載開始を編集長と決めた。①G2 ウィロビーと荒木光子（2回）、②ラストボルフ事件（1回）、③下山事件（1回）、④辻政信（2回）の計画である。1992年春には一時期他のテーマに関心を移したこともあったようだが、4月3日、編集部には電話をして「四月二十五日ごろから執筆にかかる。荒木光子は実名を出す」と宣言した。一週間後の4月10日、取材班は半藤一利と松本邸を訪問。だが、執筆を目前にした4月20日、松本清張は脳出血で倒れ、最後のプロジェクトは発表を見ることがなかった。

### 2-2: 松本清張記念館での調査から

文藝春秋編集部の記事から、執筆直前までの経緯や松本清張の作品意図はある程度わかるものの、荒木光子についてどこまで知っていたのか、もっと具体的に知るすべはないのか？ 筆者は松本清張記念館に清張が所蔵した資料のなかから荒木光子関係の資料がないか、調査を依頼した。すると、この最後のプロジェクト関係の資料を入れたと思われる文藝春秋社の手提げ紙袋が今回、発見された<sup>17</sup>。記念館では、清張が晩年執筆して

<sup>13</sup> 文藝春秋編集部「松本清張 最後のテーマは辻政信(特別企画 秘話開封)」『文藝春秋』80(11)、2002年9月、p.290。

<sup>14</sup> 同前、p.292。原典は、阿部真之助編『現代日本人物論――政界・官界・財界・労働界・文化界の人々』河出書房、1952年9月。

<sup>15</sup> 松本清張「占領「鹿鳴館」の女たち」『婦人公論』1960年11月号。『松本清張全集34：半生の記・ハノイで見たこと』(文藝春秋、1974年)に所収。

<sup>16</sup> 前掲、「松本清張 最後のテーマは辻政信」p.295。松本清張が会った荒木光子の甥（弁護士）については、松本清張記念館の調査によりほぼ特定できた（2018年11月15日、同記念館・下澤聡氏のメール）。またこのとき同席した文藝春秋の村上和宏氏にも問い合わせたが、当時のことは記憶にないとお返事だった。だが、村上氏は当時の取材メモを同記念館に寄贈された（後述）。

<sup>17</sup> 松本清張記念館の小野芳美氏と下澤聡氏らの発見による。

いた東京の自宅兼仕事場の建物のうち、書斎・書庫や応接室部分を当時の配置そのままに保存し「再現家屋」として展示しているが、清張の書斎の机のそばに置かれているのが見つかったという。(中に入っていた資料は以下の通り。)

『日本占領秘史』(竹前栄治・天川晃,1977):『日本占領秘史』(秦郁彦、袖井林二郎,1977):『マッカーサー』(クレイ・ブレア Jr.1978):『ダグラス・マッカーサー』(守川正道,1978):『図説 日本の歴史 9 占領時代』(集英社,1980):有賀美智子「回想録 GHQの人々」(『校正取引』1980):新名丈夫「占領時代の政界秘話」(『歴史読本』1980):竹前栄治「四〇万進駐軍の隠された部分」(『プレジデント』1990):秦郁彦「GHQの日本改造計画」(『プレジデント』1990):聞き取り調査報告書「辻正義氏 元東京銀行ビエンチャン支店長 '91.11.15 面接取材」:清張からのFAX部分(11/18):VHSビデオテープ「ビエンチャンS34~37 元東京銀行馬淵氏撮影」

これらの資料はほとんど一般的に入手できるものであり、目新しいものはない。だが、この資料調査の過程で、「松本清張 最後のテーマは辻正信」を担当した元文藝春秋編集者の村上和弘氏が、当時のことを記録したメモ「村上ノート」(仮称)を松本清張記念館に寄贈し、筆者も実見することができた。

### 2-3: 村上ノート(文芸春秋編集者のメモ)から

松本清張が最後のテーマに取り組もうとしていた1990年代初頭からすでに30年近くが経つ今日、関係者の記憶も曖昧である。だが、今回記念館に寄贈された村上和宏のメモ「村上ノート」からは、「松本清張 最後のテーマは辻政信」の記事には書かれていない様々な事実が浮かび上がってくる。

「村上ノート」は、1991年2月12日から92年4月10日までの出来事を綴ったノートである。ハードカバーの表紙のノートには、89頁まで細かな手書き文字でメモが付けられ、後半は白紙のまま残っている。どのような内容が記されているのか?

91年5月2日には、服部機関を縦糸として、日本の黒い霧的な連作にする構想や、「ノンフィクションはむつかしい、が実名で書く」などの記載があり、早くから実名での執筆は考えていたようである。荒木光子については、家族関係もかなり調べていたらしく、父・荘清彦や夫・荒木光太郎だけでなく、姉・福島慶子とその夫福島繁太郎[美術評論家]、娘婿の斎藤鎮男[国連大使]などの名前も登場する。1938年から翌年にかけてのベルリン滞在では、ドイツ大使オットーヤゾルゲとも親しく「冗談をいいあうような仲」であり、ナチ政権下のベルリン社交界で非常に活躍した、とある。また、東條英機とも親しく、「東条も「光子 光子」とかわいがる。戦後、「東条 つかまったとき、家族のことは光子に相談せよ」と東條英機は語ったという。ただし、「ウィロビーの愛人は誤解 金に困るわけでない メカケになってしゃんなりしてるような人ではない」と書かれており、これらは、光子の甥から聞いた話ではないかと推測される。

「村上ノート」が興味深いのは、このように取材のメモの内容だけでなく、時間が経つにつれ荒木光子関係のメモが増え、次第に松本清張の荒木光子への関心が膨らんでいったと考えられることである。1992年1月17日のメモには、「<タイトル>再軍備を実現したグループ」。「<構成> ・光子を中心としたウィロビー周辺と服部機関 ・GHQ アメリカの対日方針(再軍備)」と書かれている。このほかにも、荒木光子を慕っていたという河合栄治郎や、パシフィック・ハウスの名前も散見され、かなり荒木光子については履歴を調べていたようである。G-2については、戦史編纂を隠れ蓑にした服部卓四郎らの諜報・謀略機関だったという位置づけだが、『マッカーサー元帥レポート』に光子が担当した日本の戦争画が掲載されていたことは全く出てこない。

松本清張は、かなり昔から荒木光子には関心を持っていた。先述したように1960年の「占領『鹿鳴館』の女たち」(『婦人公論』)は、占領下でGHQの高官たちの接待をした上流階級の日本人女性を、鳥尾鶴代とチャールズ・ケーディスの関係を中心に綴った文章であるが、荒木光子についても「荒木夫人の活躍」という項目を立てて説明している。そこに記載されている事柄は、1952年頃から登場し始めた暴露記事のいくつかをベースにしたものと考えられる。このように、『日本の黒い霧』を連載していた頃に抱き始めた荒木光子に対する関心を、30年後にようやく形にしようとしたのであろう。

では、荒木光子とはいったい誰なのか? 次章からは1930年代から50年代を中心に彼女の足跡をたどってみよう。

## 第2章 戦前・戦中の荒木光子：1902年～1945年

### (1) 出生から結婚、1902～1921年

荒木光子は、1902年（明治35年）、<sup>しょうせいじろう</sup>莊清次郎の五女、莊光子として東京で生まれた。父・莊清次郎（1862-1926）は、明治・大正前期の三菱財閥の経営者（三菱合資専務理事）を務めた人物で、光子は、兄弟姉妹たちとともに裕福な家庭で何不自由なく育った。四女の姉・慶子（1900-1983、のちに福島慶子）は、美術評論家兼画商の福島繁太郎と結婚、1921年から夫とともに渡欧し、ピカソやマチス、ルオーらとも交際した随筆家である<sup>18</sup>。パリの生活や美術に詳しく、姉・慶子は、光子の豊かな美術ネットワークを築く助けとなった。光子の兄である長男・莊清彦（1894-1967）は、光子がやがて結婚する荒木光太郎と東京高等師範学校附属中学校の同窓生であり、のちに三菱商事社長になった。

1921年、光子は、東京帝国大学助教授だった経済学者の荒木光太郎と結婚する。光太郎は、日本画家の大家である荒木十畝の長男として1894年に生まれたが、画家の道には進まず、東京帝国大学法科大学で金融論を学んだ<sup>19</sup>。大学院卒業後は東京帝国大学農学部助教授となり、順調な研究者人生を歩んでいた。二人の結婚式の仲人は、青木菊雄（1917年時点で三菱合資会社総務部専務理事）である。光子と光太郎との縁は、兄・清彦が光太郎と同窓生であったことや、その縁もあって光子が結婚前から絵を習いに荒木家に入出入りしていたこと、莊清次郎と荒木十畝が同郷（現、長崎県大村市）だったことが影響したと考えられている<sup>20</sup>。

荒木光子の履歴については、夫・荒木光太郎の経歴からある程度推測することができる。管見の限りでは公に残された履歴としては、河合栄治郎編『学生と西洋』（1941年）にドイツの断片的な印象記を掲載した際（後述）、その巻末「執筆者略歴」に載せた以下の略歴がある。

「荒木光子 東京市本郷区弥生町三

明治三十五年東京に生れ、大正十年荒木光太郎に嫁す。大正十一年より十五年に互り英、獨、佛に遊ぶ。昭和十三年より十四年にかけて、再び獨逸、伊太利に行く。」<sup>21</sup>

略歴には、1902年に生まれ、1921年結婚、1923-27年に英・獨・仏に、1938-39年に獨・伊に滞在したことが書かれているだけである。

少女時代の光子についての情報は多くない。1919年に麹町精華女学校を卒業し、モダンガールとして誉れ高かったと言われる（モダンガール云々の当時の資料は未発見）。少女時代の光子は、海外の情報にも身近に接し、財閥や上流階級の子女との親密な付き合いもあったであろう。たとえば、国立国会図書館で閲覧することの出来る、荒木光子が残した戦前の数少ない文章として、「盡きぬ思ひ出」が存在する<sup>22</sup>。三菱財閥3代目総帥の岩崎久弥の次女として生まれ、34才の若さで亡くなった甘露寺澄子（1903-1937）を悼んだ文章である。11頁にわたる光子の文章が収録された『澄子』は、澄子の実姉である沢田美喜（1901-1980）が編集し、1938年9月に私家版として出版された<sup>23</sup>。

光子の実家と岩崎家の結びつきは大変深い。荒木光子の父・莊清次郎は、若い頃、三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の長男岩崎久弥の家庭教師となり、久弥の留学に同行して渡米し、岩崎家の援助によってエール大学大学院で学ぶことができた。その後も三菱合資を設立して社長となった久弥の信任を得て、恵まれた職歴を歩むことのできた清次郎とその家族たちの人生を鑑みれば、両家の子どもたち同士の親密さは十分に想像できよう。

<sup>18</sup> 福島慶子の主な著作に、福島慶子『巴里の芸術家たち』創芸社、1950；『巴里と東京』暮しの手帖社、1951年；『巴里たべある記』三笠書房、1952年；『うちの宿六』文藝春秋新社、1955年他。

<sup>19</sup> 荒木光太郎の履歴については、前掲、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」『荒木光太郎文書解説目録』（増補改訂版）2018年；「荒木光太郎教授の略歴」荒木光太郎教授追悼論文集刊行会『荒木光太郎教授追悼論文集』有楽出版社、1981年；東京大学経済学部編『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会、1976年を主に参照。

<sup>20</sup> 同前、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」、p.7。

<sup>21</sup> 河合栄治郎編『学生と西洋』日本評論社、1941年、p.745。

<sup>22</sup> 荒木光子「盡きぬ思ひ出」、澤田美喜子編『澄子』甘露寺方房（非売品）、1938年。

<sup>23</sup> 『澄子』の編者は「澤田美喜子」と記されており、本名も「美喜子」である。だが本稿では混乱を避けるために、引用以外は「沢田美喜」と表記する。



荒木光子は「盡きぬ思ひ出」のなかで、亡くなった甘露寺澄子を「すみ様」と呼び、彼女との付き合いについて以下のように語っている。

「私とすみ様とは御承知の通りずみぶん長い間の御友達でした。お互ひの外国生活の時間を除いて、小学校の時から此の間御病気になるまで、ずっと続いて居りました。お弁当のおかずを覗き合ったり、羽織を取り換へつこして着たり、その外お話も出来ない様な無邪気な事をして友情を表現し合ふのでした。」<sup>24</sup>

澄子とは、小学校の時から亡くなるまで友情が続いてきただけでなく、「最近御一緒にフランス語の御稽古をしたり、三味線を弾いたりして居りましたから、ほとんど毎日の半分は御一緒に暮らしました」<sup>25</sup>と述べているように、おそらく家族同様の付き合いだったのだろう。また、11頁に及ぶ「盡きぬ思ひ出」からは、光子と澄子のつきあいの深さのみならず、財閥の子女たちの暮らしや文化が垣間見えてくる。「盡きぬ思ひ出」は、編者「澤田美喜子様」に宛てた手紙のような形を取っており、文中で光子は、美喜子を「御姉様」と何度か呼んでいる。彼女たち3人の生年は、1901年（美喜）-1902年（光子）-1903年（澄子）であり、追悼の随筆からは同学年で親しかった光子と澄子の関係が見える一方、美喜に対しては姉として敬いつつも少し距離も感じられる。幼少の頃から病弱で裁縫やままごと遊びが好きだった澄子は、元気で活発だった姉の美喜とは対照的だったのだろう。【fig.2】

周知のように、沢田美喜は、1948年にエリザベス・サンダース・ホームを創設し、米占領軍兵士と日本人女性の中に生まれ身寄りのない混血孤児たちを育てたことで有名である。敗戦後、沢田美喜は、ジョサイア・コンドルが設計した生家の岩崎邸本邸宅（現・東京都台東区池之端）と、沢田廉三との自宅（現・東京都千代田区一番町）、大磯の岩崎家別邸をGHQに接収された。生家の岩崎家の茅町本邸敷地内では、岩崎家の人々はアメリカ人との同居を強いられ、岩崎本宅は1948年、情報収集や反共工作を行う諜報グループ「キャノン機関」の本部「本郷ハウス」となった。当時、岩崎家と米軍側との交渉を父・久弥から任されたのは、美喜だったという。

岩崎久弥が購入した美喜の麹町の自宅も同じく参謀第二部（G-2）民間情報局（CIS）に接収されて諜報活動の拠点「サワダ・ハウス」になった。地下1階、地上4階建てのサワダ・ハウスについては、戦前から沢田夫妻とつきあいがあり、CISの編集分課（the Compilation Branch）のチーフに任命されたポール・ラッシュ（Paul Rusch, 1897-1979）が、沢田邸接収の手続きを行った。そしてここで東京裁判にかかる戦争犯罪人や、日本統治に関するすべての人事資料を収集・整理する任務にあたった<sup>26</sup>。美喜が、GHQの財閥解体で政府に財産税として物納された大磯の岩崎家別荘を、エリザベス・サンダース・ホームを作るために買い戻し「進駐軍と戦った」ことは、青木富貴子『GHQと戦った女 沢田美喜』に詳しい<sup>27</sup>。

岩崎家と荘家の親密な関係ゆえに、生まれたときからの付き合いのよって荒木光子と沢田美喜はお互いを知り尽くしていたであろうし、占領下においても両者はG-2と抜き差しならない関係にあった。だが、ポール・ラッシュ、沢田美喜、荒木光子の三者の関係は謎が多い。光子と美喜の二人は拠って立つ思想と行動に大きな隔たりがあったように見え、光子と美喜、そしてアメリカの諜報機関をめぐる関係の解明が今後の課題である。

## （2）2回の海外生活：1923～26年（英仏独墺米）、1938-39年（独・伊）

さて話は戻るが、光子は結婚後まもなく、1923年から26年まで、夫・光太郎の留学に同行してヨーロッパで暮らすことになった<sup>28</sup>。光太郎が「文部省より経済学研究のためドイツ、イギリス、フランス、アメリカ在

<sup>24</sup> 前掲、『澄子』p.237.

<sup>25</sup> 同前、p.237.

<sup>26</sup> ポール・ラッシュと沢田美喜の関係については、以下を参照。山梨日日新聞社編『清里の父ポール・ラッシュ伝』ユニバース出版社、1986；エリザベス・アン・ヘンフィル（松平信久・北條鎮雄訳）『キープへの道：昭和史を拓いたポール・ラッシュ』立教大学出版会、2018年。ポール・ラッシュと沢田美喜の親しい関係はよく知られているが、占領期のラッシュと荒木光子、沢田美喜と荒木光子の関係について、さらに調査する必要がある。

<sup>27</sup> 青木富貴子『GHQと戦った女 沢田美喜』新潮社、2015年。

<sup>28</sup> 前掲、「荒木光太郎教授の略歴」『荒木光太郎教授追悼論文集』によれば、荒木光太郎の留学は、1923年3月20日から、1926年11月12日と記されている[略歴では1928年とあるが明らかに誤記である]。p.304。光太郎の留学中の様子

留を命ぜられ」<sup>29</sup>だからである。まず向かったイギリスで荒木光太郎は、ケンブリッジ大学のJ.M.ケインズの講義や、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(E.キャンナンの講義を聴講した。ベルリンでは留学中だった河合栄治郎や向坂逸郎らとともに研究会を開き、ウィーンではL.ミーゼスの私的ゼミナールに参加したり、オーストリア学派の経済学者やシュンペーターと知遇を得るなど、多くの著名な経済学者らと交流した。1931年シュンペーターが来日したときには、荒木宅を訪問する仲となった。また、光子の姉・福島慶子は夫・繁太郎と美術品を収集するなどパリに滞在しており、フランスを訪れることも多かったと思われる。そして米国を経て、1926年11月、荒木夫妻はサイベリア丸で帰国した<sup>30</sup>。

帰国の翌年、光太郎は東京帝国大学農科大学の教授に昇進し、1928年からは、「親しかった河合栄治郎の働きかけもあり」<sup>31</sup>経済学部教授を兼務、1935年に経済学部に移籍した(1941年まで農学部兼務)。経済学部へ移動した背景には、山田盛太郎(1897-1980)らマルクス経済学者が治安維持法違反によって辞職させられる事件があった。

当時、荒木夫妻が可愛がっていた若手研究者に崎村茂樹(1909-1982)という助手も気になる存在である。政治学者の加藤哲郎によれば、ドイツ語に堪能だった崎村茂樹は、荒木光子の通訳兼助手として上流社会の集いや在日ドイツ大使館に出入りし、オットー大使夫妻やリヒャルト・ゾルゲとも会っていたという<sup>32</sup>。崎村は、荒木光太郎の強い後押しで1941年から日独学術交流会議日本代表として外務省囑託の辞令を得てドイツに渡ったが、日独の敗戦を危惧して1943年9月にベルリンから当時の中立国だったスウェーデンに亡命した。この亡命が問題化するのを恐れた日本大使館は事件のみみ消しを計り、スウェーデンにいた崎村を拘束してベルリンに連れ戻した。そしてナチス・ドイツの敗戦後、崎村は日本には帰国せず中国に渡り、米国領事館に勤務し、1950年の国慶節に「毛沢東暗殺事件」に関わったという。崎村がこの期間にGHQのG-2に勤務していた荒木夫妻と接触し、G-2と米国諜報機関と関わった可能性を加藤哲郎は示唆しているが、それ以上のことは明らかになっていない。

さて、荒木光子は、幼馴染みの甘露寺澄子を失くした翌年、1938年から39年にかけて、再び夫とともにドイツに滞在することになる。光太郎が日独交換教授として渡独することが決まったからである。職場の東京帝国大学経済学部では派閥争いが激しく、当初、自由主義者の河合栄治郎と近かった光太郎は、やがて経済統制を主張する土方成美らに接近した。1939年1月に東大総長・平賀譲が、河合栄治郎と土方成美を休職処分(平賀肅学)したときには、光太郎はドイツに滞在中だったため生き残ることができた<sup>33</sup>。

この渡独に関しては、夫婦は別々に出国している。光太郎は、1938年7月、先に日本を出発<sup>34</sup>。光子は、同年10月2日に神戸から靖国丸で夫より遅れてドイツへ向かった。経路は、神戸～門司～上海～香港～シンガポール～ペナン～コロombo～アデン～スエズ～ポートサイド～ナポリ～ベルリンであり、途中で立ち寄った港で観光もしながらの1カ月以上にも及ぶ長旅だった。

このとき、靖国丸には、荒木光子のほか、野上弥生子夫妻、駐独満洲国公使・呂宣文、建築家の谷口吉郎、そして、宝塚少女歌劇団の「訪独訪伊親善芸術使節団」45名<sup>35</sup>らを含む二百数十名の乗客と船員を合わせて約400名が乗船しており、有名人を乗せたこの靖国丸の旅は新聞でも報じられた<sup>36</sup>。初の海外公演を行う宝塚少女歌劇団の使節団一行は、1か月後の11月2日にナポリに到着、4日にベルリンにたどり着き、ヨーロッパ各国を訪問して、翌39年3月4日に帰国した。歌劇団の渡欧については、日程や訪問先の出来事を綴った感想などをまとめた記念アルバムが後日出版されているので、その詳細を知ることができる<sup>37</sup>。

---

は、父・荒木十畝へのインタビューとして新聞でも報じられた。「荒木十畝画伯と助教授の光太郎さん(連載)『読売新聞』1925年1月18日、朝刊、2面。

<sup>29</sup> 同前、p.304.

<sup>30</sup> 「荒木光太郎助教授帰朝」『読売新聞』1926年11月2日、朝刊、2面。

<sup>31</sup> 前掲、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」p.7.

<sup>32</sup> 前掲、加藤哲郎「情報戦のなかの「亡命」知識人——国崎定洞から崎村茂樹まで」。

<sup>33</sup> 前掲、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」p.8.

<sup>34</sup> 「ドイツへ荒木教授 日独交換教授」『東京朝日新聞』1938年7月15日、夕刊、2面。翌39年の帰国時には、オットードイツ大使が東京駅に出迎えたことなどが報道された。「荒木教授帰る」『東京朝日新聞』1939年9月2日、朝刊、11面。

<sup>35</sup> 靖国丸に乗船していた宝塚少女歌劇団の人数については、関係者を含めて合計56名とする説もある。

<sup>36</sup> 靖国丸の乗船客は、このほか、駐独満洲国参事官・江原綱一、同理事官・孫孝思、同理事官補・王替夫、同主事・中川英一、同 笠井唯計、ハンブルク駐在満洲国総領事・安集雲、同副領事・澤口誠篤、衆議院議員・高岡大輔がいた。「靖国丸渡欧客(2日 神戸出港)」『東京朝日新聞』1938年10月1日、朝刊。

<sup>37</sup> 宝塚少女歌劇団『日・独・伊親善芸術使節渡欧記念アルバム』東郷静雄 撮影[他]、1939年5月。同書には荒木光子に

### (3) 靖国丸での渡欧の旅：1938年、野上弥生子日記から

靖国丸には小説家の野上弥生子(1885-1985)も乗船していた。英文学者で能楽研究者の夫・野上豊一郎が、日英交換教授として渡英するのに同行するためである<sup>38</sup>。渡欧に当たっては、旧青鞆社の同人らが東京駅に集まり弥生子を見送ったことも報道された。

長年日記を書き続けたことでも知られる弥生子であるが、靖国丸での日々については「欧州旅行の日記」として毎日つけていたものが残されている<sup>39</sup>。日々の記録をはじめ、宿泊・食事・交通費の費用、旅行の携行品にいたるまで事細かに書かれた日記からは、当時の知識人たちの欧州旅行の大変さと重要性がつぶさに伝わり、同時に、船上での社交の様子を綴った旅日記の合間に、ときおり戦況のニュースが挟み込まれ、戦争が本格化する時代の空気が伝わってくる。あの戦時中、彼女たちはいったい何を考え、どのように船上の時間を過ごしていたのか？そして、この日記には、荒木光子の名前がたびたび登場するのである。それぞれ短い記述だが、弥生子の日記は、戦前の荒木光子の人物像を他人が冷徹な目で綴った記録として面白く、かつ貴重である。

靖国丸は、1930年に竣工し日本郵船が運行していた遠洋定期船である。プールや映画館、娯楽施設も完備され、寄港地の産物も取り入れた食事が提供されるなど、客が長旅に退屈しないように配慮されていた。荒木光子のヨーロッパ到着までがどのような船旅だったのか、宝塚少女歌劇団の旅日誌<sup>40</sup>と野上弥生子日記を手がかりに追ってみよう。

靖国丸は、1938年10月2日、賑やかな見送りに送られて午後3時、神戸港を出港した。野上弥生子のこの日の日記には冒頭から荒木光子の名前が登場する。

「十月二日 日 晴

〔商〕

朝食後水上警察署に行く。荒木夫人と河合栄次郎氏に落ち合ふ。序でがあつたので見送りに来た云々の云ひわけをおかしく聞いた。」<sup>41</sup>

と意味深な書き方をして、荒木光子と見送りに来た河合栄治郎の二人に会ったことを記している。当時、河合栄治郎はファシズム批判の論陣を張っていたため、東大内での勢力を失い、まさに「河合栄治郎事件」の渦中にいた。1938年に『ファシズム批判』などの著作が内務省によって発売禁止処分になり、翌39年には平賀肅学で休職処分を下されるという思想弾圧を受けていた。ファシズムが広がるにつれて経済統制を主張し経済国策に協力していた夫の光太郎と河合は、思想的立場も異なり、1938年秋頃にはすでに距離があつたと思われるが、なぜ、彼は光子の見送りに来ていたのだろうか？野上弥生子日記にはそれ以上の記述はなく詳細はわからない。

神戸港を出航した靖国丸は、翌10月3日門司、10月5日上海に寄港。前日にコレラの予防注射を受けた野上弥生子は、上海で戦跡を訪問したり、夜景の見物、デパートで買物もしている。宝塚少女歌劇団は上海の陸軍病院や海軍特別陸戦隊を慰問して歓待され、戦跡訪問も行った。10月8日夜、香港着。靖国丸の一等ラウンジでは宝塚の舞踏や独唱会が催されたが、それを見た野上弥生子の評は、「蚊の鳴くやうな声で、若草式のセンチメンタリズムを一步も出ない。」<sup>42</sup>と、手厳しい。そして「たゞ天津乙女の舞踏だけは本格であるが、しかしこれをドイツの大きな劇場にもち出した時の効果を考へると、失敗は今から明白である」と続け、国際的尺度から宝塚少女歌劇団の評価を下している。

関する言及はない。

<sup>38</sup> 野上夫妻の渡英については、新聞でも報道された。「『能』の講義に渡英 野上豊一郎氏と彌生子夫妻」『東京朝日新聞』1938年8月28日夕刊：「英国へ 面、装束の粋——能楽界空前の絢爛な搬出目録」『東京朝日新聞』1938年9月29日夕刊：「筆の狙ひ 老英国の知識人——野上女史渡欧に旧同人の友情」『東京朝日新聞』1938年10月1日：「野上氏夫妻 “能”の壮途へ」『東京朝日新聞』1938年10月2日朝刊。

<sup>39</sup> 野上弥生子『野上弥生子全集：日記6』第II期 第6巻、岩波書店、1987年。野上弥生子の1938年から39年の渡欧については、戦時中に出版した『欧米の旅』も参照。野上弥生子『欧米の旅(上・中・下)』岩波文庫、2001年。だが、日記には「荒木夫人」として実名が登場し、短いながらも率直な感想を述べているのに対して、『欧米の旅』には、「A-夫人」として記され、実名は出ない。

<sup>40</sup> 小林米三「訪独伊親善芸術使節 宝塚少女歌劇団日誌(自昭和十三年十月二日 至昭和十四年三月四日)」、前掲、『日・独・伊親善芸術使節渡欧記念アルバム』。

<sup>41</sup> 前掲、『野上弥生子全集：日記6』p.31。

<sup>42</sup> 同前、pp.38-39。(10月11日の日記)

10月13日シンガポールに入港。シンガポールでは、石原産業公司の上村を案内として、野上夫妻と荒木光子はジョホールや植物園などを一緒に見物し、夜には料理屋に招待された。同席した客は、3人のほか、矢野、満洲公使、江原、満洲総領事、高岡代議士などの顔ぶれである。料理屋ではやがて芸者らの歌が始まり、光子が小唄を披露した。――「荒木夫人が小歌をうたふ。中々よい声で、本芸である。音じめも冴えたもの也」<sup>43</sup>と、弥生子は批評している。一方歌劇団は、シンガポール日本人クラブ主催の在留邦人慰問で余興を演じた。彼らが寄港した3年半後、シンガポールは日本軍によって占領され、「昭南島」と名前を変えることになる。

10月15日に入港したペナンでも、一行は日本人会の出迎えを受け、野上夫妻は光子と行動を共にしたようである<sup>44</sup>。10月19日コロomboに到着後、椰子や檳榔の熱帯植物に目を奪われながら、パパイヤやバナナを食べた弥生子は、日本人行きつけの地元の宝石屋ハシを冷やかしに行った。宝石は一つも買う気が起こらず、「青か、ミドリか、紅玉か。この小つぼけな石が私に本質的になんの役に立つだらう。ハシが出した名刺の中に猫目石を何十ポンドかで買った荒木夫人の名刺があつたのが、私を微笑させた」<sup>45</sup>と、日記にはある。

弥生子は船上では、アンドレ・ジイドの『ソヴィエト旅行記』や笠間果雄の『砂漠の国』を読み、同乗していた建築家・谷口吉郎（1904-1979）から西洋建築史に関する私的なレクチャーも受けていたようだ<sup>46</sup>。10月24日の日記に、「夜食後頭がわりに冴えてあるので、デイヴィッドを少しづつけようとしたが荒木夫人に邪魔され、十一時までデッキのおしゃべりに加はる」<sup>47</sup>と書いてある。「デイヴィッド」云々とは、弥生子が船旅の間も続けた、エリナ・ポーターの『美しき世界』（原題：Just David）の翻訳作業を指すのであろう<sup>48</sup>。

やがて靖国丸からアフリカ大陸が見え、10月25日アデンに入港。10月27日、宝塚少女歌劇団の日記によれば、「武漢三鎮陥落の無電来り...船長以下船客船員一同、宮城遥拝、君が代斉唱、万歳三唱し祝賀す」とあるが、野上日記にこれらの記載はない。10月28日、「昼の食卓は荒木さんのところへ招かれる。御亭主のぐちをきかされた。」――野上弥生子の欧州旅行の日記に「荒木」の名前が登場するのはこれが最後である。

弥生子と光子の関係はどのようなものだったのだろうか？ 青鞥社に加わり社会を冷徹に見続けてきた小説家の野上弥生子と光子では、ものの考え方も大きく異なっただけであろう。弥生子が日記の中で彼女を一貫して「荒木夫人」とよそよそしく呼んでいることやその素っ気ない描写を読むと、1か月の船旅を経ても、二人は決して親しくなったようには見えない。光子が夫同伴でない女一人旅であったがゆえ、何かと野上夫妻と一緒にいることが多かったのであろう。

その後、二人に付き合いがあった様子はない。戦後1973年1月31日の日記のなかで、知り合いの建島嘉門から光子の消息を聞いた弥生子が以下のように素っ気なく記述しているだけである。――「荒木光子さんが戦前からの異人さんづきあひを戦後利用して、じゅ[う]たん、窓掛などのゼイタク品を主として派手な商売をしてゐることも知つた。」<sup>49</sup>――嘉門と共通の知人・光子が元気であることを喜ぶわけでもないこの記述からは、「異人さん」を利用して「派手な商売」を行う荒木光子に対する批判のまなざしすら感じられる。

さて、靖国丸は10月28日夜、スエズ、29日夜ポートサイドに到着。そして翌10月30日、朝8時過ぎに船長はじめ交流のあった人々に別れを告げて、野上弥生子と豊一郎はエジプトで一行よりも先に下船した。そして、エジプト、ギリシャを経てイタリア、イギリス、フランス、ドイツ、スペインなどヨーロッパ各地を訪れたが、第二次世界大戦勃発のため、アメリカ経由で翌1939年11月に帰国した。一方、ポートサイドを出航した靖国丸は11月2日朝、ナポリに到着。宝塚少女歌劇団の一行はナポリで下船し、列車でローマを経由して、11月4日ベルリンに到着した。

<sup>43</sup> 同前、p.45.

<sup>44</sup> 同前、p.45. 「荒木さん例によりいつしよ」の記載有。

<sup>45</sup> 同前、p.51.

<sup>46</sup> 谷口吉郎は、このときの旅を以下に記している。谷口吉郎『雪あかり日記』東京出版、1947年：『雪あかり日記/せせらぎ日記』中公文庫、2015年。

<sup>47</sup> 同前、p.55.

<sup>48</sup> 野上弥生子は、『美しき世界』を1938年6月号から39年8月号まで、『婦人公論』で連載している。

<sup>49</sup> 『野上弥生子全集（日記18）』第Ⅱ期 第17巻-2、岩波書店、1990年、p.21.

#### (4) ドイツ滞在：1938-39年

荒木光子のベルリン到着がいつだったのか正確な日付は不明だが、おそらく歌劇団と同じ頃だと推測される。宝塚少女歌劇団がベルリンに着いた直後、ドイツではユダヤ人排斥の大きな事件が起こった。1938年11月9日夜から10日未明にかけてドイツ全土で、ユダヤ人商店街やシナゴグをナチスの親衛隊が次々と襲撃、放火、破壊した「水晶の夜」事件である。多数のユダヤ人が殺害され、2万6000人が強制収容所に送られたこの事件を機にナチスのユダヤ人攻撃は激化した。光子らと同じ靖国丸に乗船し、日本大使館の改築のためベルリンに赴任した谷口吉郎が、ベルリンに到着したのが、まさに水晶の夜の夜の日だった。

生前、公の場での出版物などに人生の痕跡を残すことの極めて少なかった荒木光子だが、実は、38年から39年にかけてのドイツ滞在について随筆を残している。これは、河合栄治郎が編集し1941年4月に出版した『學生と西洋』に掲載された30頁の随筆「獨逸の印象」である。内容は、1938年のクリスマス頃のベルリンの賑わいの描写から始まり、ニューダーシュテッテン、ミュンスター、キールの町を訪問したときの様子を脈絡なく綴った点描が続く。そして後半でドイツ人が不屈の精神と独特の芸術性を培ってきたのは、凍った土地を持ち他国との戦争や葛藤があったゆえだという、通俗的な解釈を述べた印象記である。だが、彼女の「獨逸の印象」が、なぜ同書に掲載されたのか不思議である。もしかしたら、荒木光太郎が執筆予定だったのを急遽光子が代わったのではないかと推測するが、証拠は見つかっていない。

『學生と西洋』は、学生に向けて専門家たちが論考を載せた叢書の1冊である。古代から歴史的に西洋文化史を捉えようとした第一部と、英独仏米伊露の6か国のそれぞれの特性を考察した第二部から構成され、執筆者には、編者の河合栄治郎をはじめ、京都学派の哲学者・高山岩男や、田中美知太郎、1939年に河合栄治郎筆禍事件に抗議して辞任した政治学者の蠟山政道、仏文学者の渡辺一夫などの研究者のほか、洋画家・有島生馬が名前を連ねている。これらのそうそうたる学者たちを見ると、研究者としてのキャリアもない荒木光子による、論考でもない随筆「獨逸の印象」は、いかにも場違いである。

河合栄治郎は戦時下の学生に精神的支柱を与えるために、『學生と西洋』を含む「学生叢書」を1936年から41年にかけて編集・刊行していた。この間に先述した河合栄治郎事件が起こり、1939年1月に休職処分（平賀肅学）を受け、2月、出版法（第17条）違反で起訴された。12巻にもものぼる「学生叢書」が出版された背景と河合の様子については、弟子の塩尻公明が詳しく書き記しているので、当時の状況を知ることができる<sup>50</sup>。

1940年4月、河合の出版法違反事件に関する東京地裁の公判準備手続きが始まり、彼は1か月で法廷に10回立った。塩尻によれば、この公判廷の戦いは、大学を去った河合の「自己の思想信念にたいする教授の忠実さと権力に屈せぬ剛毅な男性的な性格を示すところの、幾年かにわたる戦いの中でも、白眉をなすものの一つ」だったという。そして10月、「意外にも無罪の判決」が下された。ただちに控訴があり、「学生叢書」の最後の2巻『學生と西洋』と『學生と哲学』を出した1941年は、「教授が控訴院公判のために悪戦苦闘された年」<sup>51</sup>となる。

1941年3月18日、東京高裁での控訴審公判が始まり、4、5、6月と公判が続いた。荒木光子の「獨逸の印象」が収録された『學生と西洋』はまさに公判闘争の過酷な状況の中で出版されたものだった。

『學生と西洋』の序文は、三月四日、公判の準備が心せわしく行われているところに書かれ、公判進行中の四月十五日に発行された。五月の法廷は、不健康のため悪戦苦闘され、胃腸の衰弱と糖尿病の悪化とのために、裁判長の許しをえてしばらく休養された。しかし、五月下旬には慶応病院に入院して、そこから法廷に通われ、六月七日には、被告としての審理を十五回目で終了された。<sup>52</sup>

そして、東京高裁では一転有罪（300円の罰金）となり、最高裁棄却によって刑は確定した。

もちろん、「水晶の夜」や政治的なことについて荒木光子は『學生と西洋』に書ける立場にはいなかっただろう。では、1938年から39年にかけてのドイツ・イタリア滞在と、帰国後の戦時下の日本で、荒木光子は何をしていたのだろうか？ この時期も記録はほとんどないが、荒木光太郎に関する最近の研究や当時の新聞記事などを手がかりとして追ってみたい。

<sup>50</sup> 塩尻公明「解説」、社会思想研究会編『河合栄治郎全集』第18巻、社会思想社、1968年。

<sup>51</sup> 同前、p.374.

<sup>52</sup> 同前、p.374.

## (5) 荒木光太郎の日独文化交流活動

先述したように荒木光子が靖国丸に乗ってドイツに向かったのは、日独交換教授として渡独した光太郎と合流するためだった。ベルリン日本研究所の代表にも抜擢された光太郎は、「ナチス期の日独文化交流において大きな役割を果たした人物」<sup>53</sup>だった。それゆえ夫と同行した光子が当地で出会った人間やネットワークに注目する必要がある。このとき築いた河辺虎四郎や有末精三ら陸軍軍人との関係が、敗戦後、米太平洋陸軍総司令部 G-2 での荒木夫妻指揮下で行われた戦史編纂事業に直結するからである。河辺虎四郎がドイツ大使館付武官だったのは、1938年12月から40年3月までで、有末精三がイタリア大使館付武官だったのは、1936年10月から39年6月までであり<sup>54</sup>、荒木夫妻のドイツ滞在時期（1938年7月/11月～1939年6月）と重なっている。

荒木光子は、夫とともにナチスの重要な式典にも招かれていた。1939年4月20日に開催されたヒトラー総統50歳祝賀記念観兵式および茶会では、夫婦そろって招待されている。このときの日本人参加者には、大島浩（駐独大使）や白鳥敏夫（駐伊大使）、有末精三（在伊大使館付武官）らがいた<sup>55</sup>。

この祝賀記念観兵式と茶会の様子について、荒木光太郎は「ヒトラーの雰囲気」という手記を残している。光太郎は、ドイツ軍の英国との闘いやデンマーク占領を「ヤツタな」と喝采し、「獨逸外務省の厚意によつて当日参列の光栄」に浴すことができた観兵式の様子を詳細に紹介したあと、夜の茶会で握手して挨拶したヒトラーについて語っている。従来ヒトラーに対しては、「外交的手腕、その敏速な決断力といひ、驚くべきものであり、其の剽悍なる性質は、その風采より偲びえるものであらうと想像し」ていたが、思い描いていたものとは異なっていたという。

「この豫想は全く裏切られ、筆者の前に現はれたるヒトラーは已に五十歳の齢を重ねた落ちついた深みのある極めて柔かな輪郭の顔つきでこの人が今、欧州の再編成をなしつゝあり、英佛をして震駭せしめて居る人かと疑はれるほどである。然し眼は實に美しく澄んで居り人を射る如く其機智と決断力を示して居り、稀に見る人を打つ力を持って居る。」<sup>56</sup>

この手記からは、当時の光太郎が抱いていた親密なドイツ観と世界認識がよく伝わってくる。夫とともに招待された光子は、観兵式や茶会をどのように見ていたのだろうか？ 帰国後の光子の行動を鑑みると、夫の世界観とそれほど大差なかったように思われる。

荒木光太郎は、日独文化交流や国際交流にも積極的に関わった。1938年から39年のドイツ滞在中には、1934年に設立された国際文化振興会[現・国際交流基金]の在ベルリン「海外連絡員」に就任し、日独文化協会、日独文化連絡協議会、独日学徒大会の中心的役割を担った<sup>57</sup>。さらに、光太郎はドイツだけでなく、1939年6月にはイタリアで開かれたファシスト女子青年スポーツ大会に岡正雄と日本側正式代表として列席したことがわかっている<sup>58</sup>。

独日学徒大会の第1回大会は、光太郎が1939年3月、ナチス・ドイツに併合されたオーストリアのキッツビュールにおいて、法眼晋作（在独日本大使館員）や岡正雄（民族学者）と開催した日本とドイツの若手研究者たちの発表と交流会である。獨逸学生指導部と独日協会が主催し、在独日本大使館が後援した同大会には、留学中の朝永辰一郎（物理学者）や尾高尚忠（作曲家）らが参加した<sup>59</sup>。第2回独日学徒大会は、ドイツが英仏と戦争を推し進める中、チロルのキュータイで開催されている<sup>60</sup>。

<sup>53</sup> 前掲、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」p.15.

<sup>54</sup> 有末精三と河辺虎四郎の経歴については、秦郁彦『日本陸海軍総合辞典』（第2版）東京大学出版会、2005年。

<sup>55</sup> 荒木光太郎の手記によれば、日本側の参加者は、「駐獨大島大使、駐伊白鳥大使、並に有末、平出両陸軍武官、大使館樺山官補、駐西矢野公使、守屋武官、駐匈若松武官、それに東北帝大教授福井吉三郎博士」だったという。荒木光太郎「ヒトラーの雰囲気」『文藝春秋』18(8)、文藝春秋社、1940年5月号、p.252.

<sup>56</sup> 同前、p.252.

<sup>57</sup> 前掲、小堀聡「荒木光太郎文書解説（増補改訂版）」p.48.

<sup>58</sup> 前掲、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」pp.15-16.

<sup>59</sup> 同前、p.15.

<sup>60</sup> 「日独学生の交歓 チロルで大会開く」『読売新聞』1939年3月15日夕刊、2面。「...日本側は交換教授荒木光太郎博士が青年学徒廿三名を率ゐて出席...」

ドイツの次は日本で開催したいと強く希望していた荒木光太郎らの願いは、皇紀 2600 年を祝う 1940 年 4 月に実現した。「第 1 回日独学徒大会」は、日本に場を移して富士山麓河口湖畔で開かれた。このときの様子は、読売新聞では 3 日続けて写真入りで報道され、日本側の大会の指導者として荒木の名前が挙がっている<sup>61</sup>。さらに大会終了 3 カ月後の 7 月には、ラジオで「日独学生国際交歓放送」の番組が企画され、河口湖畔のホテルで開催した大会の様子の録音や、荒木光太郎の講演が放送された<sup>62</sup>。日独の学術交流の目玉として華やかな光を浴びたのである。

また、日独学徒大会の報告集『日獨文化の交流』（1941 年）では、光太郎が「大会指導者」としてその序文を書き、オイゲン・オットー独逸大使が祝辞を寄せている<sup>63</sup>。ドイツとの連携強化が叫ばれ、同年 9 月、日独伊三国同盟が締結されたとき、オイゲン・オットー（Eugen Ott, 1889-1977）はその推進者だった。また光太郎が深く関わる日独文化協会や日独協会においても名誉顧問を務めていたオットーとは<sup>64</sup>、家族ぐるみで日常的な交流もあった。オットーはその後、1941 年にリヒャルト・ゾルゲの「スパイ活動」発覚で、42 年 11 月駐日大使を解任された。

荒木光太郎は、1942 年の第 2 回日独学徒大会においても大会指導者として参加し<sup>65</sup>、日独文化協会の常任理事および評議員を務めていた。また、「ナチス・ドイツの準公式書籍『民族社会主義国家の基礎・構成および経済体制』の翻訳、『新独逸国家体系』の刊行に尽力するなど、ナチス期のドイツとの文化交流に力を入れた」<sup>66</sup>。荒木光太郎はドイツから帰国してすぐに東大の評議員のメンバーにも選ばれ、1940 年 10 月には、「新体制」を謳う東大の学生課に参与として加わることになった<sup>67</sup>。そして、1941 年 1 月にはドイツ学士院賞をドイツ政府から贈られ<sup>68</sup>、戦時下の財政金融を研究するために大蔵省内に新設された機関の室長に任命された<sup>69</sup>。このような戦時中のナチス・ドイツとの深い関りが、のちに 1945 年 11 月 17 日、東大経済学部を辞職することにつながるのである。

## （6）「日独伊婦人会」の活動

一方、荒木光子は、ドイツから帰国後、日独文化協会理事の夫の地位や滞在中に培ったネットワークを生かして、頻繁にドイツ大使館に出入りし、駐日イタリア大使のシャシント・アウリッチや、駐日ドイツ大使のオイゲン・オットーと親しく交流していた<sup>70</sup>。

日中戦争が始まると、日本国内では国民の戦争協力を促す官製国民運動が広がっていた。当初は精神運動の側面が強かったものの、やがて経済国策への協力を要請するようになる。その国民精神総動員運動のひとつとして「国民服」がある。1940 年 11 月に日本国民（男子）が常用すべきものとして制定された服装である。同年 12 月に出版された女性向けの雑誌『婦人の生活』には、荒木光子の「簡素の美しさ」という随筆が載った。女性は簡素で清潔、かつ美しくあるべしという服装の心がけを説いた文章である。3 頁余りの小文だが、「近頃流行のドイツ」でも真面目に取り組みされている服装研究の情報を紹介し、「互ひに助け合ひ、教へ合つて知識を深め、日常の生活を合理化し、新體制に添つて、面も女の本分を忘れず、優しく、賢く、美しく、あくまで日本の女らしくなる様に、どんな小さなことまでも心を配つて、此の時代を處して行き度いもの」だと結んで

61 「あす岳麓に日独学徒の交歓／山梨・河口湖」『読売新聞』1940 年 4 月 14 日夕刊、2 面；「岳麓に親善絵巻 日独学徒大会／山梨」『読売新聞』1940 年 4 月 15 日朝刊、3 面；「交歓最高潮 日独学徒大会第 2 日／山梨」『読売新聞』1940 年 4 月 16 日朝刊、7 面。

62 「今夜は日独学生交歓 明夜は戦勝独逸 ベルリンから文化と武力を放送」『読売新聞』1940 年 7 月 3 日朝刊、5 面。

63 荒木光太郎編『日獨文化の交流—日獨學徒大會研究報告』日独文化協会、明善社、1941 年。当時の資料を見ると、ドイツで開催した大会には「日独学徒大会」、日本で開催した大会には「日独学徒大会」を用いていたようである。

64 日独文化協会や日独協会については、『戦時下 日本文化団体事典』大空社、1990 年復刻。

65 日独文化協会『[日独文化協会]事業報告 昭和 17 年度』1941-43 年、p.17、p.19。

66 前掲、牧野邦昭「荒木光太郎の研究と活動」『荒木光太郎文書解説目録（増補改訂版）』p.16。

67 「東大学生課に教授の参与 新体制への第一歩を踏出す」『読売新聞』1940 年 10 月 11 日夕刊、2 面。

68 「両博士にドイツ学士院賞」『読売新聞』1941 年 1 月 27 日朝刊、3 面。

69 「財政金融体制推進の中核体設く 大蔵省内に研究室と委員会」『読売新聞』1941 年 8 月 20 日朝刊、1 面。

70 前掲、阿羅健一『秘録・日本国防軍クーデター計画』p.113。しかし同書には典拠がないので、荒木光子のドイツ大使館関係者とのつながりは、さらに調査する必要がある。

いる<sup>71</sup>。同盟国ドイツの情報も取り入れた光子の随筆は、単なる服装論を越えて、非常時における日本女性の心構えを説くものだった。

荒木光子が戦時期に日本国内で携わっていた活動として重要なのは、「日独伊婦人会」である。光太郎の日独文化交流活動への傾注と呼応するかのようになり、荒木光子は1940年12月に結成された「日独伊婦人会」の中心メンバーだった。同年9月27日に日独伊三国同盟が締結されてすぐの時期である。1940年12月10日に華族会館で開催された発会式では、荒木光子の司会のもとで東條勝子が挨拶を行い、独唱や舞踏も演じられたが、その様子が新聞では写真入りで報じられた<sup>72</sup>。

戦時下の女性団体の状況をまとめた『婦人界の動向』（1944年）には、「日独伊婦人会」の概要が記載されており<sup>73</sup>、代表委員として、東條勝子と並んで荒木光子の名前が挙げられている。

「(代表委員) 東條勝子 星野操 荒木光子

(目的及び事業) 日獨伊三國同盟を契機として三國間の婦人親善を圖るを以て目的とし、日獨伊婦人交歓會、日本婦道及び趣味紹介等を行ふ。支部數一、會員約四五十名。本會は日獨伊三國の特定の婦人を以て組織され、広く會員を募集せず」<sup>74</sup>

代表委員の筆頭に挙げられている東條勝子（1890-1982、本名：かつ子）は、周知のように東條英機の妻である。日独伊婦人会は、東條英機が1940年近衛内閣で陸軍大臣を務め、1941年から44年まで内閣総理大臣を務めた時代に、政治トップの妻が代表となって主宰していた団体だった。そして、日独伊婦人会の所在地として、荒木家の住所と電話番号——「東京都本郷区本郷三とノ六六 荒木方 / 電 小石川 七九二」が記載されていることから、実質的には荒木光子が中心となっていたと推測される。

もう一人、代表委員として名前が挙げられている星野操は、東條英機の側近、星野直樹の妻である。1937年、満洲の國務院総務長官となった星野直樹は、「満洲国」運営に大きな影響力を持ち、1941年東條内閣内閣書記官長として東條を支えたが、戦後はA級戦犯として終身刑となった（のちに釈放）人物である。1938年4月に結成された「満洲国防婦人会」は、代表を張景恵総理大臣夫人とするものの、関東軍参謀長だった東條英機の妻、勝子が実質的な主宰者であり、副会長は星野操だった<sup>75</sup>。

このように、日独伊三国同盟締結を契機として生まれ、「三國間の婦人親善を圖る」ことを目的とした「日独伊婦人会」は、東條勝子を頂点として、東條英機の側近の妻・星野操と、荒木光子によって運営され、政権中枢部の上流婦人の親睦を図る政治的な団体だった。一般からの会員は募集せず、日独伊三国の「特定の婦人のみ」をメンバーとした同会の運営は、「すべて獨伊大使館との直接交渉の下に行はれて」<sup>76</sup>いた。会員数は、「日本側一三〇名、神奈川支部一〇〇名、獨逸四〇名、伊太利一〇名」であり、イタリアよりもドイツとの交流が中心だったと考えられる<sup>77</sup>。事業内容は、

「一、日獨伊三國間の婦人問題の研究及資料の便宜提供 二、日獨伊三國夫人の歓送迎及交驩に関する斡旋 三、日獨伊語の講習會開催 四、日獨伊三國兒童親善交驩の斡旋 五、前項を目的とする展覽會、講演會、講習會、座談會、映画會の開催 六、本會と目的を同ふする團體及個人との聯絡」<sup>78</sup>

と謳っているが、それほど多様なことが実施できたわけではなさそうだ。

1941年度の主要事業報告を見ると、次のような事項が挙げられており、かなり戦時色が強い。

<sup>71</sup> 荒木光子「簡素の美しさ」『婦人の生活』第1冊、生活社、1940年12月、p.83.

<sup>72</sup> 「童心の“三国同盟” 枢軸推進へ婦人連も新発足」『読売新聞』1940年12月11日夕刊、2面。

<sup>73</sup> 市川房枝編『婦人界の動向：婦人年報第1輯』（『近代婦人問題名著選集；社会問題編』第12巻、日本図書センター、1983年。原本は1944年、文松堂から出版。

<sup>74</sup> 「附録二 婦人團體及び婦人關係團體名簿」、同前、p.299。同名簿は原本・復刻版ともに「東條勝子」の「勝」の字が判読不明であるが、日独伊婦人会を紹介した『日本文化団体年鑑』（1943年版）では、明確に「東條勝子」の名前が記されている。『戦時下 日本文化団体事典』第3巻、大空社、1990年、p.652.

<sup>75</sup> 星野操が当時の満洲について語った文章や座談会を参照。星野操「満洲にゆく花嫁」『婦人公論』1943年9月1日：東條勝子・星野操子他「満洲生活の喜びを語る座談会」『婦人倶楽部』1942年10月1日。

<sup>76</sup> 前掲、『婦人界の動向』p.236.

<sup>77</sup> 日本文化中央聯盟『日本文化団体年鑑』1943年（『戦時下 日本文化団体事典』第3巻、1990年復刻）。日独伊婦人会の会員数については、おそらく調査時期の違いからだろうが資料により人数が異なる。

<sup>78</sup> 同前、p.652.



「昭和十六年度主要事業 一、戦時獨逸に訊く「一問一答座談會」 二、獨伊将兵感謝會 三、親善慰問繪葉書獨伊戦線に発送 四、神奈川支部設立 五、獨逸國際婦人大會出席日本婦人代表選衡」<sup>79</sup>

最後に挙げられた「五、獨逸國際婦人大會出席日本婦人代表選衡」とは、1941年6月、ドイツで開催された枢軸国婦人大會への日本代表の選定を、ドイツナチス党婦人部からドイツ大使館を通じて委嘱され、日本婦人代表として、愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会から代表を推薦したことを指す（大会には戦況悪化のため参加できず）<sup>80</sup>。

1942年には、日独伊婦人会は、婦人団体の統合のために事業内容を縮小して、日本婦道の紹介や交歓会を催し<sup>81</sup>、9月に大日本婦人会と共催で日独伊三国同盟成立二周年記念会を開き祝った。同年5月5日の「大東亜戦下初めて迎へた端午の節句、尚武の日を祝つて」開催された日独伊の少年少女の交歓会を報じる新聞記事では、競技に興ずる子どもたちに拍手を送り参観する荒木光子、東條勝子、星野操の3人の写真が、大きく新聞に掲載されている【fig.3】<sup>82</sup>。その後の日独伊婦人会の詳細についてはよくわからないが、1943年5月14日に、東京女子師範学校で開催された日本女性の武道修練を参観したり<sup>83</sup>、11月には、ドイツ大使夫人が大使邸で主催した茶会に、荒木光子ら日独伊婦人会員ら120名が招待されたという記録も残っており、活動は続いていたようである<sup>84</sup>。

東條勝子と荒木光子との付き合いがいつから始まったのかはわからないが、二人は「姉妹同然といわれるほど親密な関係にあった」ようである。そのため、敗戦直後、光子は、「東條勝子から夫英機の弁護ができる人物として服部[卓四郎]の早期帰還を懇請されていた」という<sup>85</sup>。荒木光子が、1940年に日独伊三国同盟締結を契機として結成された日独伊婦人会の実務的な中心を担ったであろうことが推測できる。このように、ドイツ滞在中と帰国後に築いた軍人や政治家とのネットワークは、敗戦後の占領下で生かされることになるのである。

<sup>79</sup> 同前、p.652. 1941年度の日独伊婦人会の主要事業は新聞でも報道された。「枢軸戦線へ繪葉書」『東京朝日新聞』1941年1月26日朝刊、7面：「日獨伊將兵感謝の會」『東京朝日新聞』1941年3月9日夕刊、2面：「日獨伊婦人會支部」『東京朝日新聞』1941年4月20日朝刊、7面。

<sup>80</sup> 前掲、『婦人界の動向：婦人年報第1輯』p.236.

<sup>81</sup> 同前、p.236.

<sup>82</sup> 「多摩川園の端午の節句 ニコニコ東条夫人 日独伊少年少女の交歓会」『読売新聞』1942年5月6日夕刊、2面。

<sup>83</sup> 「大和撫子の意氣に感嘆 盟邦婦人武道参観」『読売新聞』1943年5月15日朝刊、3面。

<sup>84</sup> 内務省警保局外事課『外事月報（昭和十八年十二月分）』[復刻]不二出版、1994年、p.59. このとき茶会に招待したのは、ハインリヒ・ゲオルク・スターマー駐日ドイツ大使夫人。主な出席者は、「東條勝子、星野操、白鳥君子、荒木光子以下百二十名。」

<sup>85</sup> 前掲、田中宏巳『消されたマッカーサーの戦い』pp.140-141.

### 第3章 荒木光子の戦後：1945年～1960年代

#### (1) 『マッカーサー元帥レポート』編纂の歴史と組織

ドイツから帰国し、ドイツ大使館や東條勝子らと親密なつきあいをしていた荒木光子が、敗戦直後にどのような行動をしていたのか、詳細は不明である。だが、1945年11月に東大を追われた荒木光太郎とともに、『マッカーサー元帥レポート』編纂のために1947年夏頃にはGHQ参謀第二部（G-2）で働き始めていたのは事実である。

『マッカーサー元帥レポート』は、1946年秋から、米太平洋陸軍総司令部G-2歴史課（G2 Historical Section）が、G-2部長チャールズ・ウィロビー（Charles Andrew Willoughby, 1892-1972）の直接指揮下で編纂した南西太平洋地域を中心とした戦史である。編纂を任されたチャールズ・ウィロビーは、ドイツ人の父とアメリカ人の母を持ちドイツで生まれ、アメリカに移住・帰化し米陸軍に入隊したドイツ系アメリカ人である。1941年の日本軍とのフィリピン攻略戦においては、マッカーサーとともにフィリピンから脱出し、マッカーサーの信任が特に厚かったと言われている。

『マッカーサー元帥レポート』の編纂は、もともとは1942年からG-3歴史課のニーダープルエム大佐（William J. Niederpruem）のグループが作業を始め、1945年10月に戦史報告書の草稿を完成させたが、マッカーサーはこれを気に入らず、1945年12月、戦史編纂業務をG-3からG-2に移管した経緯がある。G-2は、情報・諜報・保安・検閲を主任務としており、徹底した反共主義者だったチャールズ・ウィロビーが部長を務めていた。マッカーサーからG-3の草稿を渡され修正を指示されたG-2のウィロビーは、自分の直接指導の下で全面的に書き直すこととなった。旧日本軍の参謀もスタッフに加えてようやく1950年に完成したが、またしてもマッカーサーが気に入らなかったため、彼の死後、1966年ようやく刊行されるという歴史を持つ<sup>86</sup>。

『マッカーサー元帥レポート』の編纂過程については、田中宏巳の『消されたマッカーサーの戦い』が詳しい。その後発表された土屋礼子の「占領軍G-2歴史課と旧日本軍人グループ」も参考になる<sup>87</sup>。全4冊もある分厚い『マッカーサー元帥レポート』が「レポート（報告書）」というタイトルになっているのは奇異であるが、それには組織における戦史編纂の権限と制限が理由にあったようだ。田中によれば、「米陸軍の中で戦史を編纂できるのは陸軍省参謀部歴史班だけで、海外に派遣されている部隊は、戦史報告書か戦史資料の提出を義務づけられているだけ」<sup>88</sup>だった。「極東総司令部戦史班にしても編纂できるのは、戦史報告書であり、出版まで許されていなかった」ため、米政府と米陸軍による正当な国家事業でもなく、米陸軍規定に違反する『マッカーサー元帥レポート』の編纂については、過度の秘密主義が取られたのだという。秘密主義については、対ソ関係を考慮したとか、米大統領を目指すマッカーサーの経歴に傷がつかないようにするためだとか、対ソ・対中共の情報収集の機関だったためなどの理由も言われている。

こうして、マッカーサーの信頼の厚かったウィロビーは、組織作りから資料収集、刊行準備などを直接指揮して、南西太平洋方面軍の戦いとその意義を太平洋戦争史の中に位置づけるべく、編纂の作業をスタートさせることになった。ウィロビーは、G-3が作製した695頁もの草稿のうち、二分の一以上を削除し残りを書き直したが、必要以上に自身を称賛する書きぶりをマッカーサーが気に入らなかったのか、却下されたため、今度は歴史家に依頼することにしたという<sup>89</sup>。1945年12月、G-2歴史課が日本郵船ビルに設置され、G-3から移った5名とG-2内から集められたスタッフによって、調査係、編集係、制作係、図書係などの組織が編成される。そして、編纂作業のリーダーとして抜擢されたのが、メリーランド大学歴史学教授を退職し海軍士官として軍務についていたゴードン・W・ブランゲ（Gordon William Prange, 1910-1980）だった。

旧日本軍をめぐるのは1945年10月から12月にかけて、軍令部、参謀本部、陸海軍省が次々と廃止され、

<sup>86</sup> 『マッカーサー元帥レポート』の出版は以下の通り。Reports of General MacArthur, prepared by his General Staff [Editor in chief, Charles A. Willoughby], Government Printing Office, 1966。日本では、GHQ参謀第2部編『マッカーサー元帥レポート』（全4巻）現代史料出版、1998年として復刻。現在は、全文が陸軍戦史センターのサイトで公開されている。https://history.army.mil/books/wwii/MacArthur%20Reports/MacArthurR.htm  
Reports of General MacArthurに関する基本的な情報については、国会図書館のレサーチ・ナビ「GHQ/FEC, Military History Section, The Reports of General MacArthur」が詳しい。

<sup>87</sup> 土屋礼子「占領軍G-2歴史課と旧日本軍人グループ」『Intelligence インテリジェンス』16巻、2016年。

<sup>88</sup> 前掲、田中宏巳『消されたマッカーサーの戦い』p.132。

<sup>89</sup> 同前、pp.126-127。

代わって第一・第二復員省が設置された。同年12月1日、GHQは日本政府に対して戦史編纂の調査機関の設置を指示し、第一復員省史実部と第二復員省史実調査部を設置する。田中宏巳は、ウィロビーはこれらの日本の復員省に設けられた史実部と調査部に、G-2 歴史課の本来任務である戦史報告書の作成と戦史資料の整理の仕事を行わせることによって、『マッカーサー元帥レポート』編纂事業を行う余力を作り出したのではないかと推測している<sup>90</sup>。そして、第一復員省史実部の部長に就任したのが、服部卓四郎(1901-1960)だった。服部は、戦時中は大本営の参謀本部作戦課長であり、東條の秘書官も務めており、真っ先に戦犯に挙げられてもおかしくない人物だった。日本の敗戦により中国軍の捕虜収容所に部下とともに収容されていたが、1946年5月、GHQの指令によって彼一人だけが急遽帰国を許され、復員省で働くことになったのである。

G-2 歴史課は、1947年初頭から旧日本軍の司令官や政治家たちの尋問を行い、1947年夏、これらの尋問を行った対象者の中から有末精三(元参謀本部情報部長)、河辺虎四郎(元参謀本部次長)、服部卓四郎(東條陸相秘書)、大前敏一(元海軍大佐)らを歴史課のスタッフに加えた。彼らは服部同様、みな、戦犯か追放になりかねない旧日本陸海軍の参謀たちだった。河辺・大前は、米軍進駐に先立ちマニラに降伏使節団のメンバーとして出向き厚木進駐前のウィロビーと会見し、ドイツ語でウィロビーと話したことがある。また有末は、進駐先遣隊を厚木に出迎えた責任者だった<sup>91</sup>。このように彼らは、敗戦直後からウィロビーら占領米軍中枢と接触があったのである。そして、有末も河辺も、荒木夫妻とはドイツ勤務の時代から交流があった。

徹底した反共主義者だったウィロビー少将は、これらの参謀ののちには朝鮮戦争のための作戦計画にも使い、一方、旧参謀らは日本の再軍備プランを計画したと言われている。そして、アメリカ側のチーフが、メリーランド大学教授のゴードン・プラングであり、日本側の戦史編纂のチーフ・エディターを務めたのが、元東大教授の荒木光太郎である。当時荒木は、戦時中のナチス・ドイツとの深い関わりの責任を問われて、1945年11月17日に東京大学を「願により免官」していた。このとき代わりに復職したのが、1938年に人民戦線事件で起訴され大学を追われたマルクス主義経済学者の大内兵衛だった。

## (2) 『マッカーサー元帥レポート』への荒木光子の関与①—G-2 スタッフの手記から

荒木光子は、1947年夏頃から夫の荒木光太郎とともに、G-2 歴史課で働くことになった。

オフィスが日比谷の日本郵船ビルの3階にあったため、光子はすぐに「郵船ビルの淀君」と呼ばれるほど権力をもつようになる。だが、どのようにしてウィロビーの信を得ることができたのか、詳細はわかっていない。当時から荒木光子の社交性と語学力がウィロビーを虜にしたとか、ウィロビーの愛人だったと専ら言われてきたが、出会いのきっかけがどうして生まれたのか。光子はゾルゲ事件に関するウィロビーの聞き取り調査にも応じており、彼女の情報をもとに戦後のゾルゲ事件のイメージが形成されたともいわれる。「荒木夫妻はウィロビー少将の幕僚の旧知だった関係から少将と特別に親密な間柄」<sup>92</sup>だったというが、その人脈と繋がりが具体的に解明されたとは言い難い。ヒントのひとつになるのは、島尾鶴代の同時期の行動範囲に荒木光子の名前も登場することである。たとえば、GHQ高官をもてなすために上流階級の日本人女性たちが動員されたことは知られているが、内閣書記官長だった檜橋渡が敗戦直後から開いたパーティーに荒木光子も招かれていた<sup>93</sup>。

いずれにせよ、戦時中にはナチスの高官やゾルゲと親交があり、海外経験も豊富で英語とドイツ語が堪能、かつ社交的だった光子は、チャールズ・ウィロビーの絶大な信頼を得ていた。彼女は『マッカーサー元帥レポート』の編纂では、絵画やビジュアル史料の収集・製作を任せられ、そのために莫大な経費を使うことができた。このように光子が編纂に関わり絶大な権力を持っていたことは、次に見るように当時の歴史課のスタッフなどの証言からも明らかである。

1952年5月号の『中央公論』は、編纂に関わった日本側スタッフによる暴露記事、「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」を掲載した。執筆者は丸山一太郎という仮名である。丸山は、「先輩の某氏から勧められ」昭和二十二年の六月頃から戦史編纂を手伝うようになったという経緯から始め、夫妻が自らをウィロビーに売りこんだという噂もあり、いかに「荒木夫妻のアメリカ側に対する発言力は超大なもの」だったかを語っている。

<sup>90</sup> 同前、p.135.

<sup>91</sup> 有末精三『有末機関長の手記—終戦秘話』芙蓉書房、1976年。

<sup>92</sup> 前掲、丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」p.265。タイトルの「内実」を「内幕」と誤記しているデータがあるが(CiNii, NDL他)、「内実」が正しい。

<sup>93</sup> 木村勝美『子爵夫人 島尾鶴代』立風書房、1992年、p.66.

「殊に、夫人はミセス・アラキの名で総司令部関係に顔が通っており、少将との折衝においては、特に天馬空をゆく奔放自在の手腕をふるっていた。荒木夫妻の意見に異議があつても「ウィロビーの意思だから」と押しつけられると、不承不承、われわれは譲らざるをえなかつた。「郵船ビルの淀君」にはまったく歯が立たなかつたというのが実情である。」<sup>94</sup>

ウィロビーの権力を背景に手腕を振るう光子には、誰も逆らえなかつた様子がうかがえる。そして、続けて戦時中の光子とドイツ高官との関係やゾルゲ事件にまで言及する。

「光子夫人は三菱の重役の娘で、戦争中にはドイツ大使オットーとも親交があり、また東條首相夫人勝子とも肝胆相照らす仲であつた。戦後ゾルゲ尾崎事件がウィロビー少将の手で再び掘りかえされたのは、オットーの関係で事件の詳細に通じていた光子夫人の情報提供によるものといわれている。オットー、東條勝子、ウィロビー少将という彼女の遍歴のあとをたどれば、荒木光子という「社交婦人」の性格はおのずと浮びあがつてくるはずである。」<sup>95</sup>

荒木光子が戦時中、日独伊婦人会や日独文化協会でも活動を共にした東條勝子やオイゲン・オットーと親しかったことは、すでに前章で検証した通りである。

荒木光子の存在については、米軍関係者の証言もある。丸山の『中央公論』の暴露記事が出てすぐに、歴史課のスタッフであったジェローム・フォレストとクラーク・カワカミが内情を伝えた記事「マッカーサー元帥と彼の消えた戦史」（1952年10月）である<sup>96</sup>。【fig.4】

それによれば荒木光太郎は名ばかりの編集責任者であつたが<sup>97</sup>、光子は「非凡で人の気をそそる人」だったという。『中央公論』の手記に出てくる光子の戦時中の東條グループやナチスとの親密な付き合いがもし本当なら、彼女は占領軍の到着後すぐに「180度の方向転換」をうまくやったのだらうと、その豹変ぶりを指摘している。また、『マッカーサー元帥レポート』が日本の戦争画のコレクションから採った絵画を多数載せており、御前会議の絵の質の高さにも言及している。

これらの手記から2年遅れて出版されたハリー・エマソン・ワイルズ（Harry Emerson Wildes, 1890-1982）の著書『東京旋風』（1954年）においても、光子の関与に関する記述は具体的だ。1947年から48年にかけてG-2歴史課に配属されたワイルズは、戦史編纂の内部の様子を詳細に綴り、荒木光子が美術家・地図製作者・挿画家たちを率いて編纂の仕事に携わっていたと述べている。

「東京大学経済学教授の夫人である女流彫刻家荒木ミツコを班長として、美術家・地図製作者・挿画家の一団が組織され、戦争の推移を明らかにするための何百枚という、極彩色の図面・図表・地図・歴史画が作製された。荒木夫人は魅力に富んだ、きわめて頭のよい社交婦人で、政治的な野心をもち、ドイツ人や、イタリア人の外交官仲間に顔が売っていた。しかしウィロビーは彼女の誠実さに、深い信頼をおいて、その助言をたかく買っていた。自由に自分の事務所に出入りさせたばかりでなく、歴史編纂についての面倒な技術的・財務的責任まで彼女にまかせていた」<sup>98</sup>

そして旧参謀たちは、「異常に高い俸給のうえに、食料品・宿舍・酒・煙草・その他の贅沢品を支給されており、「荒木夫人は、軍用自動車に日本婦人をのせてはならぬという規則の除外例を認められ、その資格上、個人用にジープを一台支給されていた」<sup>99</sup>と明かしている。

<sup>94</sup> 前掲、丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」、p.266.

<sup>95</sup> 同前、p.266.

<sup>96</sup> クラーク・カワカミ（Clarke H. Kawakami, 1909-1985）は、米国で活躍したジャーナリスト、河上清（1873-1949）の息子。

<sup>97</sup> Jerome Forrest and Clarke H. Kawakami, "General MacArthur and his vanishing war history", The Reporter, October 14, 1952, p.23.

<sup>98</sup> ハリー・エマソン・ワイルズ（井上勇訳）『東京旋風—これが占領軍だった』時事通信社、1954年、p.259. 原著は、Harry Emerson Wildes, Typhoon in Tokyo: the occupation and its aftermath, Macmillan, 1954. ワイルズは荒木光子を「女流彫刻家」だとしているが、これは誤りである。もしかしたらそのように自称していたのかもしれないが、光子が美術界に強いネットワークを持ち、戦史編纂においてもビジュアル関係を任されていたため誤解したのであろう。

<sup>99</sup> 同前、p.261.

1952 年は、丸山一太郎の日本語手記（5 月）、K.カワカミ&J.フォレストの英語記事（10 月）だけでなく、暴露記事の出版が相次いだ。明らかに偽名の板垣進助という人物は、その著書『この自由党！』のなかで「らしやめん暗躍物語」という一節を割いて、鳥尾夫人とケーディス、荒木光子とウィロビーらの愛人関係をめぐる噂を赤裸々に描き、「占領政治の七年間にはアメリカ側に取り入って、うまく立ち廻ろうとした日本人は数多かったが、光子の渉外的怪手腕に比べるものはほとんどいなかった」と述べている<sup>100</sup>。また、同じ 1952 年の『改造』にも、「楠貴美子」名で鳥尾鶴代や荒木光子のゴシップが掲載されているが、その書き方に類似性が見られることから、もしかしたら板垣進助と同一人物だった可能性もある<sup>101</sup>。

さらに時代が下り、ロッキード事件が明るみになった 1976 年、戦後の日米の情報戦をテーマに、G-2 に雇われた旧日本軍人の有末精三と大井篤が出席して当時を振り返る座談会が開かれた。有末も大井も占領時代は「たいへん愉快」で「一番幸せだった」と回顧し、荒木光太郎が『マッカーサー元帥レポート』の日本側チーフになったのは、ウィロビーに荒木光子が気に入られていたからだと言っている<sup>102</sup>。

このように占領期が終わった直後から断片的に『マッカーサー元帥レポート』の編纂過程と荒木光子の存在が暴露されたが<sup>103</sup>、21 世紀に入るまでそれらが歴史的に検証されることはなかった。

### （3）『マッカーサー元帥レポート』への荒木光子の関与②—プランゲ・ペーパーズから

#### 3-1：名簿

このように、日本本土の占領が終わったのち相次いで出版された G-2 関係者自身による手記でも明らかなように、荒木光子の編纂プロジェクトへの関与は深かったにもかかわらず、極秘にしていた編纂事業の性格もあり、これまで公の記録を探するのは非常に難しかった。だが、荒木光子が G-2 歴史課で働いていたことを明確に裏付ける文書がアメリカ合州国に残っている。メリーランド大学のホーンベイク図書館にあるプランゲ・ペーパーズ（Gordon W. Prange Papers）のなかに、G-2 歴史課のスタッフ名簿が所蔵されているのである<sup>104</sup>。

この G-2 歴史部のうち「第 2 巻に従事する日本人名簿」という名簿には、筆頭の荒木光太郎（1. ARAKI, Mitsutaro, Mr.）の名前の次に荒木夫人（2. ARAKI, Mrs.）がはっきりと挙げられている。【資料 I】アルファベット順で旧職位とともに記載された『マッカーサー元帥レポート』第 2 巻の日本人スタッフは、以下の 20 名である。

1. 荒木光太郎、2. 荒木夫人、3. 有末精三、4. 千早正隆、5. 藤原岩市、6. 原四郎、7. 服部卓四郎、8. いながわ・すみこ、9. 加登川幸太郎、10. 河辺虎四郎、11. こいずみ・かずこ、12. 小松演、13. 曲寿郎、14. 中村勝平、15. 大前敏一、16. 大井篤、17. 太田庄次、18. 杉田一次、19. 田中兼五郎、20. 谷内守男<sup>105</sup>

書類の日付は、「12 月 19 日」とだけしか書かれていないため正確な時期は不明であり、名簿作成の前後にはメンバーの入れ替わりもあったとも考えられる。この文書の次のページには、G-2 歴史課の「第 2 巻」担当のこれらの 20 名以外の、「プロダクション」担当者 20 名、「ライブラリー」担当者 8 名の日本人名が掲載されている。合計 48 名という数字は、G-2 歴史課では 40 名から最大 80 名の日本人スタッフが働いていたという様々な証言とも一致する。

<sup>100</sup> 板垣進助『この自由党！ 後篇：祖国なき政治』理論社、1952 年、p.173.

<sup>101</sup> 楠貴美子「占領下に躍った女子学習院グループ—口さがなき十二歳の国たみ」『改造』（増刊号）33（6）、1952 年、4 月。板垣進助は板垣退助、楠貴美子は楠木正成（＝楠公）を振り、後者は女性のゴシップを扱っているのが女性名にしたのだろう。

<sup>102</sup> 有末精三、大井篤、児島襄「内側から見た G2—元日本軍高級参謀と GHQ」（ロッキード疑獄特集）『朝日ジャーナル』18（18）、1976 年 5 月 7 日、p.18.

<sup>103</sup> 荒木光子は、五島勉の『東京の貞操』（青春出版社、1958 年）にも登場するが、ゴシップ的扱いで、事実関係に間違いもある。同書は、『性暴力問題資料集成』（第 16 巻、不二出版、2006 年）に所収。

<sup>104</sup> この文書「第 2 巻に従事する日本人名簿」は、2008 年春に初めてメリーランド大学に調査に行った時に、発見していた。その後、大規模な資料整理あり、2018 年の訪問時には当時と資料番号も異なったため再調査する過程で、プランゲ宛の私信を発見した。

<sup>105</sup> File “G-2 staff”, Series 4, Box 3, Gordon. W. Prange Papers, University of Maryland. 漢字表記のわからない 2 名は女性であり、肩書もないためタイピストなどの事務職と考えられる。

なお、この名簿が所収されているプランゲ・ペーパーズは、プランゲ博士の未発表原稿、真珠湾攻撃とミッドウェー海戦に関わった米・日本軍人へのインタビュー、友人や出版社との交流記録、授業のメモや写真などを含む資料群であり、メリーランド大学のホーンベイク図書館で閲覧することができる<sup>106</sup>。今回調査した写真のなかには、G-2 歴史課で働く日本人グループの写真【fig.5】や、1976 年に『朝日ジャーナル』の座談会「内側から見たG2」で紹介されていた「G2 戦史室の日本人関係者」と同じ写真も存在した。1950 年4月に東京・目黒の雅叙園で撮影された写真【fig.6】であるが、宴会場の舞台であろうか、全く同じ場所で芸者と一緒にG-2 スタッフが写った写真もあり、当時の仕事の雰囲気を感じさせる。

### 3-2：プランゲとの私信

2018 年にプランゲ・ペーパーズ (Gordon W. Prange Papers) の調査を行ったとき、筆者は新たに荒木光子/荒木光太郎がプランゲに宛てた私信を6通発見した。【資料Ⅱ】タイプ打ちが5通と手書きの手紙が1通である。日付のないメモのような手紙や、名前がイニシャルだけで「M.Araki」となっているため、荒木光子なのか荒木光太郎なのか判別のつかないものも含まれるが、手紙が保管されていたファイル名の年代から作成時期を推測して列挙すると次のようになる。

まず初めに紹介する1通目は、日付がないが、ファイルの年代から1948年頃と推測される<sup>107</sup>。光子がその日の午後、プランゲに頼んでいた買物をキャンセルしてほしいと書いた短い手紙である。プランゲの親切に感謝してキャンセルを詫言っている。

2通目も「月曜朝」のみの記載だが、1948年頃であろう<sup>108</sup>。急用があるので光子がプランゲに会いたいという内容だが、「My dear Dr. Prange」の呼びかけて始まり、二人の親密な関係を感じさせる手紙である。

親愛なるプランゲ博士さま

最近、あなたとお会いする機会がなくてとても残念です。急に暑くなってきたせいか、このところ気分があまりよくありません。それで数日家にいたいのですが、私のためにお時間を割いていただければ（行き帰りも含めて2時間くらい？）、あなたにお会いしたいです。

あなたがどんなにお忙しいか知っていますが、私たちがよき友であることを信じて、もしできるなら私に会いに来てくださると思います。あなたは、「友だちとしてあなたを信用できる」し、もし、困っているなら私を助ける用意もあるとおっしゃいました。今、まさにそうなんです。

もし来てくださるなら、すごく感謝します。ちょっと緊急で重要なことなので、今日か明日にでも。おっしゃる時間ならいつでもお待ちしております。ランチか、お茶か、夕食か、ビールでも一杯いかがですか？

あなたに愛の告白をしたり、家庭の厄介ごとに巻き込むのを心配しないで。私はもうそんなに若くはないんです！ ある意味、あなたに関係のあることでもあります。複雑すぎて手紙では書けません。

用意ができたなら、私に電話して、いつ来られるか知らせていただくか、私の夫に私を電話口に呼び出すよう言ってください。[下線は原文通り]

荒木光子とプランゲが、『マッカーサー元帥レポート』の編集に関わり、その中心にいたからと言って、わざわざ自宅に呼び出すというのは、愛人関係ではなくても日頃からオフィシャルな関係以上のつきあいがあったからだろう。そして、日本側編集のチーフだった荒木光太郎ではなく、妻の光子が、直接、プランゲとやりとりしていることに驚かされる。また、プランゲが荒木家を訪問するのも初めてではなさそうだ。

3通目は、「Mitsuko A」の署名があり、あとから鉛筆で日付を記載された1949年9月の手紙である<sup>109</sup>。これは具体的にどんな出来事があったのがわからないが、G-2 内部で編集・印刷をめぐるもめごとがあり、光子が自分の主張を箇条書きにしてプランゲに相談している内容である。手紙には大日本印刷 (Dai-Nippon) や Cap. Ryckaert, Papa(光太郎のことか?) の名前も見られ、最後に、「これは秘密の手紙なので、破ってください」と頼んで終わっている。

<sup>106</sup> プランゲ・ペーパーズはプランゲ文庫ではなくメリーランド大学図書館の大学アーカイブス所蔵。

<sup>107</sup> File "Willoughby, Charles...Correspondence, circa 1948", Series 6, Box 15, Gordon W. Prange Papers, University of Maryland "

<sup>108</sup> Ibid., Gordon W. Prange papers.

<sup>109</sup> File "General Correspondence, 1949-1950", Series 4, Box 3, Gordon W. Prange papers, University of Maryland

4通目は、1950年8月28日付の手書きの手紙である<sup>110</sup>。署名は「M. Araki」となっており、他の5通の署名と似ているため光子か光太郎か、どちらが書いたのかは明確に判別しがたい。切迫感のある手紙の内容は、第20章の編集を終えたが、大井が執筆した個所に非常に問題が多いことを告げたのち、プランゲに対して自分たちの主張を理解して全く新しいものを書き直すよう提案をしたものである。

G-2 歴史課スタッフ内部の根深い対立については、『中央公論』の丸山一太郎の手記にも記されている。手記によれば、対立は開戦史と終戦史の解釈をめぐる起こった。最初の対立――「開戦の主因を一方的に日本の侵略行為に求めるか、英米の政治的・経済的厭迫によって開戦に追い込まれたとみるか」<sup>111</sup>において、開戦史を担当した荒木光太郎や服部、原は後者の立場に立っていた。それに対してクラーク・カワカミは、東條英機を弁護するような開戦史に対して異議を申し立て、書き換えを要求したという。終戦史をめぐるのは、この章を担当した海軍の大井篤と、旧陸軍側とで対立があり、「大井氏側にはクラーク河上があり、反対側にはミセス・アラキがついていた。」<sup>112</sup>結局大井の意見が通ったようであるが、「戦争中の陸海軍の意見の相剋が、戦史編纂の上にも、はつきり姿を現わしたとみるべきであろう」と、丸山は述べている。1950年8月28日のプランゲ宛の手紙の中で荒木が編集を終えたという「第20章」とは、鈴木内閣の成立、天皇の主導権、ポツダム宣言、原子爆弾、ソ連の参戦などの項目が含まれる「降伏への決定 (Decision to Surrender)」のことに違いない。

5通目は、1950年11月1日付、「M. Araki」の署名である<sup>113</sup>。手紙は、『マッカーサー元帥レポート』第2巻（日本側担当）の第1章から5章に関するプランゲの考えは理解したので、日本側編纂グループに興奮しないで黙っているように指示する、という書き出しから始まっている。よほど、日本側スタッフが激怒するような事態が起こっていたのだろう。そして、すでに1949年3月に、Col. SvenssonやLt. Col. Caseたちに渡した第3章の自分たちの代替案を使ってくれと、強く懇願して手紙は終わる。件の「第3章」とは、おそらく「第3章：戦争に向かう政治的軍事的進展」の章であり、開戦の原因をめぐる解釈が最も対立した部分であろう。「結局、総司令部側では別に開戦史を書いたようだが、この一幕は戦史編纂のなかでは一番大きな波瀾」<sup>114</sup>だったと丸山一太郎が述べているように、『マッカーサー元帥レポート』完成間際の1950年11月初頭までこの対立を引きずっていたことがわかるのである。おそらく、1950年8月28日と11月1日の手紙は、戦史をどう記述するかという編集内容に関わることであり、最初の3通の文体とも異なることから、荒木光太郎が書いた可能性が高い。

最後の手紙は、プランゲに宛てた日付のない礼状である。戦史編纂の第一線を離れるプランゲに、感謝とお別れの言葉を述べ、広重のコレクションを贈ると簡単に書かれている。送り手の筆頭に、「M. Araki」の自筆署名があり、以下、河辺、有末、服部、大前、杉田、太田、藤原、原、田中の順で名前が連ねられている。この手紙の内容は、プランゲが同じ「Section」から去ることに対する日本人スタッフらの謝辞であり、プランゲ・ペーパーズの「1949-50年」ファイルに綴じられている。またプランゲの経歴を詳細にみると、1946年10月から文官の修史官 (Historian) としてG-2歴史課に勤務し戦史編纂に従事していたが、1949年6月からは歴史部長を務めている。これらをふまえると、おそらくこの手紙も彼が歴史部長となった時期に作成されたものと推測される。

このほか、プランゲ・ペーパーズには、リチャルト・ゾルゲに関する荒木光子のインタビューの記録が残されている。1965年1月6日（水）に行われた「荒木光太郎夫人へのインタビュー1」の文書である<sup>115</sup>。ゾルゲ研究者のなかではよく知られた資料なのだろうが、興味深い。文書は、12枚に及ぶプランゲ自身の手書きのもの、それをタイプ打ちした4枚である。

それによれば、この日12時から2時半まで、帝国ホテルで、荒木夫人や千早[正隆]<sup>116</sup>と一緒にランチをし

<sup>110</sup> File "General Correspondence", Series 4, Box3, Gordon W. Prange papers, University of Maryland

<sup>111</sup> 前掲、丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」p.269.

<sup>112</sup> 同前、p.269.

<sup>113</sup> File "General Correspondence, 1942-1950", Series 4, Box3, Gordon W. Prange papers, University of Maryland

<sup>114</sup> 前掲、丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」p.269.

<sup>115</sup> File "Araki, Mitsutaro -- Interviews, 1965", Series 6, Box 1, Gordon W. Prange papers, University of Maryland. この

「Richard Sorge: Forever a Stranger and "Master Spy"」文書のファイルには、「荒木光太郎-インタビュー、1965年」と書かれているが、光太郎は1951年に死去しており、内容は荒木光子に対するものである。また、インタビューの実施日は、1964年1月6日（水）と記載されているが、この日は月曜日であり、翌年の同日は水曜日であり、1965年の誤記である。

<sup>116</sup> 文書のなかでは「Chihaya」としか記していないが、千早正隆であろう。連合艦隊参謀だった千早は、敗戦後G-2歴

たあと、かつてG-2 歴史課のあった場所にできた新しいビルのバーで、飲み物を飲みながらインタビューを開始した。プランゲと千早がインタビューの意図を説明すると、喜んで協力すると荒木夫人は答え、ゾルゲの顔について、「悪魔の顔」「嘘つきの顔」「信用できない顔」「最初は美しかったけど、やがて彼の顔の醜さがわかるが、いつも興味深い顔だった」と述べた。荒木夫人は自らもアーティストだったので、ゾルゲにモデルになってほしいと頼んだが断られた話や、ゾルゲの酒の飲み方がカモフラージュだったこと、駐日大使ヘルベルト・フォン・ディルクゼン夫人が光子を娘のように可愛がってくれたこと、ディルクゼンとゾルゲの関係、オットー大使とゾルゲのチェスを介した親密な付き合い、女性たちにはもてて、「すごく魅力的で」「本当の紳士」だったことなど。なかでもオットーについて、荒木夫人は「すごく、すごくよく知って」おり、オットーと妻との馴れ初めや人柄についても多く語っている。あるときゾルゲが入院中に地震が起り、「五人の看護婦が彼の上に覆いかぶさって守ろうとした」というエピソードもある。インタビューのあと、千早は仕事場に帰ったが、プランゲは、ホテルの自室に荒木夫人を誘って、ゾルゲに関する調査資料を見せた。さらに次の月曜の夜、夕食を共にする約束をした。「荒木夫人はオットー大使や、フォン・ミルバッハ、ドイツの外交官についてたくさんを知っており、彼女が協力してくれることになってすごく嬉しい」と記している。

この荒木光子のインタビューが収められているプランゲ・ペーパーズのシリーズ6「リヒャルト・ゾルゲ：永遠の異邦人"マスター・スパイ"」には、このほかにも伊藤律や宮城与徳に関する文書もあり興味深い。本稿では、ゾルゲ事件関連の資料についてこれ以上は触れないことにする。

さて、今回発見した荒木光子/光太郎からプランゲ宛の手紙は、数多い手紙の一部であろうが、光子とプランゲが直接やり取りする親密な関係であったことや、G-2 歴史課編纂スタッフ内部の熾烈な対立の断片が伝わってくる。従来の研究や証言では、荒木光子とウィロビーとの「愛人関係」が取りざたされることがほとんどだったため、光子が具体的に何をして、どんな役割を果たしたのかについて、実証的な証拠は挙げられていなかった。それゆえ、今回発見したプランゲ宛の光子の手紙からは、ウィロビーの威光に頼るだけでなくG-2 内部で様々な実権を握っていたであろう彼女の姿が具体的に浮かび上がる貴重な資料と言えるのである。ウィロビーとの私信の調査などは今後の課題としたい。

#### (4) 『マッカーサー元帥レポート』への荒木光子の関与③——NARAI 調査から

##### 4-1：校正時の指示メモ

プランゲ・ペーパーズを所蔵しているメリーランド大学からバスですぐの場所に、米国国立公文書館NARAIがある。同館には、『マッカーサー元帥レポート』に関する関係文書や、図版集などの原資料が所蔵されている。すでにこれらの資料の複写は、「GHQ/FEC, Military History Section, The Reports of General MacArthur」として、日本の国立国会図書館・憲政資料室でデジタル公開されているが、カラフルな「マッカーサー元帥レポート図版集 (illustrations of Reports of General MacArthur)」をNARAIで実見すると、その保存状態がよいのに驚かされる。この図版集を保管した5つのボックスには、日米双方によって作られた戦況地図、占領下の日本の写真、戦争画等の視覚資料があるが、残念ながら「御前会議」や制昨年不明の日本の戦争画の現物などは見つからなかった。

原稿・編纂資料文書には、日本の戦争画掲載のページに編集側の指示メモが付けられており、荒木夫人 (Mrs. Araki) の名前がたびたび登場する<sup>117</sup>。たとえば、「No.169: 宮城前広場」に付けられたメモには、「1. これは、荒木夫人の監督の下で準備されたスケッチの複製のひとつである」と、荒木夫人が戦後に宮城前広場の絵を描かせたことが明確に書かれている。「No.171: 軍旗捧焼式」と、「No.173: 靖国社頭英霊に詫ぶ」の挿絵にも、同様の文言の1950年6月20日付のメモがクリップで止められている【資料Ⅲ】。1950年4月22日付の「No.166 御前会議」の挿絵に関するメモには、荒木夫人の名前はないが、8月9-10日夜、皇居の防空壕で開かれた歴史的な会議を再現した「大日本[印刷]」の色彩に、我々はまだ満足していない」と書かれている。「我々」とは荒木光子たちのことであろう。これらのメモから、荒木光子の監督のもとに編集が進められ、色彩にこだ

史部で働き、プランゲに協力して関係者の聴取や資料の収集を行った人物である。プランゲの『トラトラトラ——真珠湾奇襲秘話』(1966年)や『ゾルゲ・東京を狙え』(1985年)などを翻訳した。

<sup>117</sup> The Reports of General MacArthur, Drafts and Manuscript. RG338, Box 11-2, NARA.



わった細かな指示が、完成間近まで大日本印刷に出されていたことがわかるのである。

#### 4-2：アルバム『日本の戦争画コレクション』の序文

米国国立公文書館NARAIIには、もうひとつ興味深い資料がある。『日本の戦争画コレクション (Collection of Japanese War Paintings)』というアルバムである<sup>118</sup>。このコレクションについては、マッカーサーが直接関与していた可能性が高い。袖井林二郎らの『マッカーサー——記録・戦後日本の原点』によれば、「マッカーサーは、上野の東京都美術館の一面にしまいこまれたこの総計一五二点の絵について、GHQ情報部の美術主任だった荒木光子（東京帝大教授荒木光太郎夫人）に命じて、完全なリストをまとめさせただけでなく、白黒写真による縮小コピーを一部だけ作らせ、製本して手元においた（一九四七年十二月）」<sup>119</sup>。さらにモノクロにした理由として、「カラーで撮影すれば、その生々しさに憤激して画家の戦争責任を追及する声がかならずアメリカからおきてくるから、撮影はモノクロに限ること、とマッカーサーは言明した」<sup>120</sup>という。

この『日本の戦争画コレクション』は、1946年夏（8月21日～9月2日）、上野の東京都美術館で占領軍関係者に戦時中の日本の戦争画を見せるためにGHQが開催した展覧会をもとに、出品された作品を一枚ずつ写真添付した記録アルバムである。その序文を、荒木光子が書いているのである【資料IV上段】。日付は、1947年12月18日、荒木光子の肩書はアート・エディターとなっている。

極東軍総司令部 軍事情報部、一般幕僚

1947年12月18日

#### 序文

上野の戦争画展は、支那事変から1945年終戦までの時期の絵画が含まれている。これらの絵画は、現代の戦争に関する日本の芸術家の考えと、この10年間の日本の芸術家たちの進歩と技術の双方を記した興味深い記録である。それゆえ、これらの絵画は、日本美術の歴史家と研究者にとって、非常に興味深く価値のあるものとなるだろう。

もともとこれらの画家たちの目的は、純粋なプロパガンダや日本軍の歴史と極めて近いものだった。招集された画家たちは貧しく、出来た絵画にはほとんど価値がなかった。戦争が続くにつれて、より優れた芸術家とさらなる自由が媒体にもテーマにももたらされ、これらの絵画は芸術のより高い水準へと高められた。後者のグループの画家たちは、戦争の芸術的な表現に身を捧げ、彼らの絵画は日本における良質の芸術家の技術を代表するものである。

荒木光子

アート・エディター

荒木光子のこの序文は、色々な意味で大変興味深い。日本の戦争画は当初はプロパガンダや日本軍の歴史を記録するのに過ぎなかった価値のない絵画だったが、時間が経つにつれて、芸術的に磨かれ、日本の芸術家の技術を代表するものになったという光子の評価は、今日では当然に思えるかもしれない。だが、光子のこの評価や、彼女が所属したGHQの組織と戦争画の関係は、占領下の戦争画に関する従来の研究を書き換えるかもしれないのである。

敗戦直後から、各地に散逸していた戦争記録画は、藤田嗣治や山田新一らが米軍から依頼され収集を始めたが、まもなく戦勝国のオーストラリアなども日本の戦争画の存在に気づき入手したがっていた。もし、戦争画がプロパガンダなら即刻廃棄しなくてはならず、芸術作品であるなら保護し、戦利品なら連合軍にも分配しなくてはならない。GHQ-SCAPは、プロパガンダなのか芸術なのか——「それらをどうすればよいのか」と悩み、東京都美術館の倉庫に留めおかれ、1951年に密かにアメリカに持ち運ばれた<sup>121</sup>。日本に「無期限貸与」の形で戻ってくるのは、20年後の1970年である。これらの占領期の歴史を考えてみると、1948年末という

<sup>118</sup> “Prints: Collection of Japanese War Paintings, 1937-1945,” RG331 JWP, Box 1-4, NARA.

<sup>119</sup> 袖井林二郎・福島鏗郎編『マッカーサー——記録・戦後日本の原点』日本放送出版協会、1982年、p.166.

<sup>120</sup> 同前、p.167.

<sup>121</sup> 占領期の戦争画の歴史に関する主な研究は以下を参照。河田明久「「それらをどうすればよいのか」——米国公文書にみる「戦争記録画」接收の経緯」『近代画説』8、1999年；平瀬礼太「戦争画とアメリカ」『姫路市立美術館紀要』第3号、1999年；平瀬礼太「戦争画の行方——1945～現在」針生一郎他編『戦争と美術 1937-1945』国書刊行会 2007年；Tan Vincent Louie「占領下日本における戦争記録画没収と移送の事情」『デザイン理論』56号、意匠学会、2010年。

この時期にGHQ軍事情報部の名の下で、日本の戦争画に対して芸術性を認めた荒木光子の評価は重要であるが、これまでの戦争画研究で取り上げられたことはない。また、民間情報教育局CIEの文書や動向ばかりを調査してきた従来の戦争画研究の在り方を再考し、G-2と他の機関がどのような関係にあったのかなどをこれから解明する必要があるだろう。

さて、この『日本の戦争画コレクション』が興味深いのは序文だけではない。アメリカ公文書館NARAIは、このCollection of Japanese War Paintingsの資料を4件所蔵している。前回2008年に訪問した時にはその内1冊しかゆっくり見る時間がなかったのだが、2018年の調査では他のアルバムにも目を通すことができた。3件はアルバム形式で、ネガフィルム形で冷蔵庫で保管中の1件は、取り出すまで時間がかかるということで諦めた。だが、全く同じ内容であるはずの3冊のアルバムもゲラ刷りの図版が挟み込まれていたり、戦争画のリストに手書きで書き込みがあったり、微妙に異なるのである。

まず、荒木光子と『マッカーサー元帥レポート』の関係で言えば、序文の次に掲載された作品リストと、挟み込まれたゲラ刷りが重要な意味を持つ。4件のうちBox1/4は、目次がなく抜けている写真もある。Box2/4のアルバムは、表紙が変色して一部に破損もあり痛みが一番ひどいが、戦争画の全ての写真が貼りつけられており、序文の次のページから始まる戦争画のリストの横に対照番号を書いた紙が貼りつけられ最も情報は詳細だ。Box3/4は、目次に手書きで書き込みがあり、『マッカーサー元帥レポート』に使用する作品を選ぶのに利用したアルバムだと考えられる【資料IV下段】。

作品リストには、「米太平洋陸軍総司令部、日本の戦争画索引：日本・東京・上野美術館」のタイトルが付けられ、絵画の写真は全て、米陸軍通信隊によるものだと記されていた。No.1、川端実<<出動する船舶兵>>から始まり、No.147、矢沢弦月<<攻略直後のシンガポール軍港>>までと、さらに5点の作品を合わせて152点が、タイトル、作者名、接收場所、制作年とともにリスト化されているのである<sup>122</sup>。手書きでチェックが付けられた作品は、すべて『マッカーサー元帥レポート』で使用された絵画であるが、まだ数が少ないので、選定途中の様子だと考えられる。

さらに、2018年の調査であらためて気づいたのが、Box3/4のアルバム『日本の戦争画コレクション』に挟み込まれた戦争画の色見本だった。黄、オレンジ、ピンク、青、茶などの色で印刷された7枚の色見本の図版は、小磯良平の水彩画だ【資料V左】。<<ネグロス島の攻撃>>(Assault on Negros Island)のタイトルと、「昭和二十三年三月十七日」の日付、「PLATE NO. 53X」の番号が付されている。スケッチには小磯良平のサインも入っている。編纂者はこの小磯良平の絵を『マッカーサー元帥レポート』に載せるのに最後まで執着していたようであるが、理由は不明だが結局掲載されなかった。だが、小磯良平はこの絵をいつ、どのようにして描いたのだろうか？ 現物は残っているのか？ 小磯良平とGHQのG-2との関係はどうだったのか？ 関連する手紙や文書などの資料は残されているのだろうか？

小磯良平記念館の廣田生馬学芸員によれば、この<<ネグロス島の攻撃>>という作品は見たことも聞いたこともなく、マニラやフィリピンでの小磯スケッチは、確認されていないとのことだった(2018年9月時点)<sup>123</sup>。さらに、小磯良平が陸軍省嘱託として1942年に南方に派遣されており、マニラには行ったがネグロス島にまで足を伸ばしたかは不明だのご教示いただいた。小磯は神戸空襲で自宅を焼かれ、転々と仮住まいを替えたため、手紙等の資料が殆ど残っておらず、占領期のことがよくわかっていないらしい。「戦後に描かれた戦争画としては本件が初めて明るみになったものかも知れ」<sup>124</sup>ないとのことのお返事だった。

筆者は、小磯良平は写真を元に、荒木光子らの指示によって描いたものだと推測している。なぜなら、小磯のこの絵画にそっくりの写真が存在するからである【資料V右】。それは、大本営陸軍報道部が1943年に出版した戦記『大東亜写真戦記』に掲載され、「ネグロス島バコロド市へ進撃中の歩兵部隊」を撮影した「ネグロス島進撃」という説明が付いている<sup>125</sup>。写真が写すのは、モクモクと煙の上がる前方へ歩く日本軍の歩兵部隊の後ろ姿だ。小磯の絵では、手前の道に余白が出来て、日本兵の後ろ姿がより焦点化されているが、構図といい煙などの背景といい、全く同じシーンである。

さらに、『マッカーサー元帥レポート』には、同じ『大東亜写真戦記』の写真の元にしたと考えられる戦争画が、もう一枚存在する。阪倉宜暢の<<前線に向ふ補給縦列>>という戦争画である。この阪倉の絵画と構図も同

<sup>122</sup> 本稿での作品名は現在、戦争記録画を保管する東京国立近代美術館での作品名に倣った。

<sup>123</sup> 神戸市立小磯良平記念館の廣田生馬学芸係長には、電話やメールで戦時期・占領期の小磯良平についてご教示いただき、小磯が陸軍省嘱託として1942年南方へ派遣されたときの資料なども教えていただいた。

<sup>124</sup> 廣田生馬学芸係長から筆者宛のメール、2018年9月17日。

<sup>125</sup> 大本営陸軍報道部監修『大東亜写真戦記』誠文堂新光社、1943年、p.35。

じ写真が、『大東亜写真戦記』に載っているのである【fig.7】<sup>126</sup>。

ところで、阪倉宜暢の「前線に向ふ補給縦列」も、小磯良平の「ネグロス島の攻撃」も、ともに「昭和二十三年三月十七日」の日付が付いている。『マッカーサー元帥レポート』には、この謎の日付のついた絵画が10枚掲載されているが、10枚全てが同じ日に描かれたとは考えにくい。マッカーサーの戦時中の動きを振り返ると、1942年1月に日本軍に占領されたフィリピンのコレヒドール島を脱出して、オーストラリアの北端ダーウィン郊外のバチラーフィールドにたどり着いたのが、3月17日。そして、3月21日にアデレードで有名な「アイ・シャル・リターン」宣言をすることになる。マッカーサーは、オーストラリアに到着した3月17日に、南西太平洋方面の連合軍総司令官に就任している。この3月17日を再起と勝利を誓った日付として、それから6年後、占領下の日本人画家たちに新しく描かせた絵画の制作日としたのではないだろうか。

2018年の国立公文書館とプランゲ・ペーパーズの調査では、以上のように、『マッカーサー元帥レポート』の編纂にあたり、荒木光子が戦争画に関わる部分の中心的役割を果たしたことがわかった。G-2歴史課の日本人スタッフの名簿やプランゲとの親密な関係の私信、校正メモ、『日本の戦争画コレクション』の作成（序文・索引）など、具体的な資料を発見・確認することができた。

ワシントンDCとメリーランド州の調査では、それだけでなく、国立海軍資料館と同美術館も訪問した<sup>127</sup>。ワシントンDCの中心部に近い国立海軍資料館では、松見吉彦の「第一次ソロモン海戦(Battle of Savo Island)」、本間秀岳の「山本五十六肖像」【fig.8】と「九軍神」の絵画3枚を調査することができた。また、国立海軍美術館には、日本の戦争画4点が所蔵されていることがわかった。これらの絵画が同館に所蔵されるようになった経緯を記した関係文書によれば、東京国立近代美術館が所蔵する戦争画群と異なる時期と経路を取っており、大変興味深い。本稿では省略する。NARAIでは残念ながら『マッカーサー元帥レポート』に掲載され、国立近代美術館にも返還されていない日本の戦争画の現物や、「御前会議」のさらなる資料は見つからなかった。ワシントンDC郊外にある陸軍資料館は、陸軍関係の戦争画などの資料を所蔵していると考えられるが、現在閉館中のため本助成金の研究期間中には調査が叶わなかった。リニューアル・オープンしたら調査することにした。

<sup>126</sup> 同前、p.172。阪倉宜暢の「前線に向ふ補給縦列」が『大東亜写真戦記』の写真をもとに描かれたことについては、すでに拙論「「御前会議」の表象」（前掲、p.35）で述べたので、本稿では省略する。

<sup>127</sup> 2018年9月6日に訪問調査した米国国立海軍資料館と美術館では、同館学芸員に、日本の戦争画の現物や関連書類、倉庫などを、平瀬礼太・愛知県立美術館学芸員とともに見せていただき、資料館には大変お世話になった。これらの調査の準備にあたっては、米国の美術史家、Paul Berry氏に協力いただいた。

## 第4章 終章：荒木光子のその後

### (1) 占領終了後の荒木光子

『マッカーサー元帥レポート』の編纂は、1950年12月に2年半をかけて終了し、翌年初めに5部だけ印刷された。『東京旋風』では、「日本郵船会社班の日本側専門家の言葉によれば、軍の副官が大急ぎで、印刷所に派遣され、大あわてに五組の組見本をとりまとめ、ほかの組見本は全部破棄し、組版はこわすことを命じ、原稿その他のオリジナルな資料はすべてトラックに積んで、東京のとある秘密倉庫に運ばれた」<sup>128</sup>とあるが、それ以上の詳しい経緯はわかっていない。

同1951年4月に、マッカーサーが解任され、ウィロビーも退任・帰国し、8月9日にG-2は廃止された。ウィロビーの後ろ盾を失った荒木光子は権力を急速に失い、さらに同年9月29日には、夫・荒木光太郎を肝臓がんのために亡くした。翌1952年、光子は夫が所蔵していた膨大な蔵書を「故荒木光太郎蔵書」として近畿大学に譲渡（有償）し、54年、名古屋大学にも譲渡（無償）した。それらが今日の荒木光太郎研究の基礎資料となっている。

夫の蔵書の始末をした光子は、その後渡米し、アメリカ人の衣服デザイナーと出会ったことを機に、デザイナーの道を歩み始めた。そして1956年4月12日、「パシフィック・ハウス・ジャパン」という会社の設立に関わる。社長を川田義彦（第一物産出身）が務め、主要メンバーは、元米海軍将校のウィリアム・シュラーガー（William Shurager）、ワシントン大学でインテリア・デザインを学んだデール・ケラー（Dale Keller）、そして荒木光子だった。日本で最初の「日本色」を取り入れた洋式室内装飾専門メーカーとなったパシフィック・ハウス・ジャパンは、米軍関係に人脈のあるシュラーガーを通じて、米軍基地の将校宿舎のインテリア・デザインや、そこで使用される家具のデザインなどの仕事を受注した<sup>129</sup>。

会社設立から5年目の1958年、荒木光子は、「室内装飾デザインで活躍するパシフィック・ハウスの荒木光子さん」として、雑誌『実業の日本』で、顔写真付きで紹介されたことがある【fig.9】。戦後、公の舞台では滅多に姿を現わさなかった荒木光子の珍しい写真である。記事によれば、「昼は切地をメーカーに注文したり、客の相手をしたり、ビジネスに奮闘し、夜はデザインの工夫をしたり、その下絵を書いたりして、八面六臂の忙しい毎日を送っている」とあり、忙しい日常を送っていたようである<sup>130</sup>。また、インテリアコーディネーターの草分けとして活躍した村上英子は、1959年から63年にかけてパシフィック・ハウス・ジャパンで荒木光子のアシスタントを務めた経験を持つ。村上は自身の著作の中で、荒木光子と初めて会ったとき、「男仕立てのスーツをお召しになって、帽子をかぶり、足を組んでミスター・シュラウガーと英語で話す」姿に驚いたと回想している<sup>131</sup>。男性と対等に、しかも英語で話す荒木光子は、「この会社の実際の実力者」だったと証言する。

インテリア・デザインの研究者、片山勢津子らのパシフィック・ハウス・ジャパンに関する調査によれば、そのデザインの特徴は「駐留軍の好みを反映して、アメリカのモダンデザインに日本のオリエンタルな要素の加わったもの」だったという<sup>132</sup>。荒木光子たちの起こしたパシフィック・ハウス・デザインは、完全なパッケージ・インテリアを提供するだけでなく、ショールームを設置し、「システムチックなデザインを展開」した。占領期に米軍内部で働き、強力なネットワークと彼らの好みもよく知っていた荒木光子は、美術の知識を生かして、日本の伝統柄をインテリア・デザインにうまく取り入れることができたのであろう。その後、パシフィック・ハウス・ジャパンは、1960年頃から米軍基地以外の仕事も手掛けるようになり、大使館からも注文が入るようになった。東京オリンピックに向けて新幹線や道路が作られ、競技場や関連施設が次々と建設された時

<sup>128</sup> 前掲、『東京旋風』p.261.

<sup>129</sup> パシフィック・ハウス・ジャパンやウィリアム・シュラーガーについては、当時の建築雑誌に記事が多数ある。ウィリアム・シュラーガー「インテリア・デザイナーの視覚に免許制を」『国際建築』26（12）、国際建築協会、1959年12月号他。

<sup>130</sup> 留井重平「室内装飾デザインで活躍する パシフィック・ハウスの荒木光子さん」（「趣味を生かして活躍する二人の未亡人の話」）『実業の日本』実業之日本社、1958年5月、p.94.

<sup>131</sup> 村上英子『障子がカーテンに変わったころ—昭和のインテリア』かもす、ハウジングエージェンシー出版局、2015年。

<sup>132</sup> 片山勢津子・橘田由美子「第二次大戦後の日本のインテリアデザイン事務所—パシフィック・ハウス・ジャパンとミルドレッド・ワダー」『生活造形』45巻、京都女子大学生生活造形学教室、2000年3月、p.61.

代である。海外の賓客をもてなすためのホテルとして計画された大倉ホテル（現・ホテルオークラ）は、重厚な和のテーストをコンセプトとし、日本の伝統柄を使うのがうまいパシフィック・ハウス・ジャパンが担当することになった。この頃自宅を建替え中だった荒木光子は、「ホテルニュージャパンに長期滞在」<sup>133</sup>して仕事に励み、1962年、大倉ホテルが完成すると、光子はヨーロッパに出かけたようである。だが、中心メンバーだったシュラーガーが、大倉ホテル竣工直後にアメリカで死去したため、1963年に会社は解散した。

先述したプランゲによる荒木光子のインタビューは、その翌1965年1月の出来事である。記録には、荒木夫人と次の月曜夜にディナーを共にするため、6時45分に大倉ホテルのロビーで会う約束をしたと書かれている。自らがインテリア・デザインを手がけた大倉ホテルで、このとき光子はどのような気持ちで、プランゲに何を語ったのだろうか。

同年、4月5日、マッカーサーが死去し、66年、『マッカーサー元帥レポート』は、米国政府印刷庁（Government Printing Office: GPO）からようやく出版された。それから20年後、1986年6月5日、荒木光子は、84年の人生を閉じた。

## （2）本プロジェクトのまとめ

本プロジェクト「松本清張、未完の仕事——≪荒木光子の戦後史≫」では、GHQ参謀第2部（G-2）で『マッカーサー元帥レポート』の編纂に携わった荒木光子の仕事を解明するために、戦時期と占領期の行動を中心にその人生の軌跡をたどった。

第一章では、筆者が戦争画と御前会議の絵画を調べる中で「荒木光子」という謎の人物と出会った経緯に始まり、本プロジェクトの問題意識と課題について述べた。次に松本清張記念館での調査においては、清張自身が紙袋に入れて保管していた関係資料が発見され、清張が目を通していた資料の一端がわかった。また、当時の文藝春秋編集者であった村上和宏の記録メモ（村上ノート）を詳細に検討することによって、清張の荒木光子に対する関心が徐々に膨らんでいった様子が明らかになった。

第二章では、荒木光子の誕生から敗戦までの時期（1902～1945年）をたどった。戦前・戦時期から荒木光子がナチス・ドイツの高官や日本の軍人たちと親しかったことは様々な手記にも出てくるものの、その具体的な資料などは示されていない。今回の調査によって、荒木光子が、1940年に日独伊三国同盟締結を契機として結成された日独伊婦人会の実務的な中心を担ったであろうことや、敗戦後の占領下で生かされることになる軍人や政治家とのネットワークも垣間見えてきた。戦時中にドイツで築いた河辺虎四郎や有末精三ら日本のエリート軍人との交流や、オイゲン・オットー大使やリヒャルト・ゾルゲとの親密なつきあいから得られた光子の「情報」は、プランゲやウィロビーを通して戦後のゾルゲ像を形成するのに一役買うことになった。

また、1938年にドイツに向かった靖国丸では、作家の野上弥生子や宝塚少女歌劇団らと同じ船に乗り合わせることになり、その旅の記録から、船旅の様子や切迫する時代の空気が伝わってくる。特に荒木光子の名前がたびたび登場する野上弥生子の日記は、身の回りに起こる出来事や人物を冷徹な目で見ずえており、戦前の荒木光子を知る有力な手がかりのひとつとなる。

第三章では、占領期、GHQ参謀第二部（G-2）で働いていた時期に焦点を当て、1960年代前半までの人生を追った。2018年に行った国立公文書館とプランゲ・ペーパーズの調査では、荒木光子が『マッカーサー元帥レポート』の戦争画編纂の中心にいたことを各種の資料からあらためて確認することができた。G-2歴史課の日本人スタッフの名簿やプランゲとの親密な関係の私信、校正メモ、『日本の戦争画コレクション』の作成（序文・索引）など、具体的な資料の発見・確認は、本プロジェクトにおける重要な成果である。

これまで荒木光子に関しては、ウィロビーとの愛人関係がスキャンダラスに語られることが多く、光子が『マッカーサー元帥レポート』の編纂に具体的にどのように関わり、どのような仕事をを行ったかという点については、ほとんど実証的な研究はなされてこなかった。プランゲ・ペーパーズから見つかった荒木光子によるプランゲ宛の私信は、プランゲとの親密な関係だけでなく、彼女の編纂事業における位置や、日米スタッフの対立だけでなく旧海軍・陸軍の日本スタッフ内部の対立の様子も伝えてくれる。「○○の愛人」「女スパイ」「美貌の」などの修辞によって曇らされてきた眼からジェンダーバイヤスを解き放って、これらの資料を見る必要がある。

<sup>133</sup> 前掲、村上英子、p.48.

2018年の渡米調査では、『マッカーサー元帥レポート』に掲載されてはいるが、東京国立近代美術館にも返還されていない日本の戦争画や「御前会議」に関する資料は、残念ながら見つからなかった。現在閉鎖中の米国陸軍資料館や他の関係ミュージアムも含めて、さらに調査する必要がある。

### (3) おわりに：再び、「御前会議」の謎へ

さて、私が荒木光子に関心を持ったのは、彼女が占領下に米軍の戦記に掲載するため、「御前会議」の絵をわざわざ描かせていたことについてだった。今回のプロジェクトで新たにこの絵について解明できたことは、残念ながらまだそれほど多くない。本稿の最初に挙げた問い——いったい誰が、どのような意図で、「御前会議」の絵を描かせたのか？ どのようにして日本人画家による戦争画を集め、使用したのか？——は、ある程度、これまでの調査でわかったが、寺内萬治郎の油彩画「御前会議」や下絵を描いたと言われる阪倉宜暢の絵の所蔵機関をはじめとして、いまだにわからないことは多い。

ここで、これまでわかったことを簡単に整理したい。荒木光子が『マッカーサー元帥レポート』の編纂で担当したのは、ビジュアル面だったことや、御前会議の絵を描かせることを発案し、莫大な費用と時間をかけて実行したことは、早くから証言に出てくる。1952年に『中央公論』に発表された丸山一太郎の「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」は、重要な情報が満載であることにあらためて気づくが、このなかで荒木光子と御前会議の絵画について、次のように語っているのは重要である。

「ミセス・アラキの戦史編纂における役目は図版の依頼や製作であつたが、事務的な進行と財布の紐は夫人が握っていた。夫人の発案で最後の御前会議の絵をかかせ、戦史の中に原色版として入れることになつたが、その一枚の絵のために費やした金と時間は、まったく莫大なものであつた。何から何まで寸分の違いがあつては恐れ多いというので、御前会議のテーブル掛けの切れ端を宮内庁から特別に取りよせたり、御前会議の出席者に一々問合せてその日の席次や服装まで調べあげるといふ丹念さ。絵筆をとつたのは寺内萬治郎画伯の弟子で酒倉(ママ)という洋画家だつたが、後から後から面倒な注文がでてくるので、悲鳴をあげる有様だつた。」<sup>134</sup>

丸山は、御前会議の絵の発案をし画家に描かせたのが荒木光子だということ、寺内萬治郎の弟子の坂倉[阪倉]が実際に描いたこと、そのために莫大な費用と時間をかけたことを具体的に述べている。阪倉宜暢については、彼の「前線に向ふ補給縦列」という絵が、『マッカーサー元帥レポート』に掲載されており、それが陸軍報道部が戦時中出版した『大東亜写真戦記』の写真を元に行っていることは、先述した通りである。

この暴露記事が出てから、3年後の1955年4月、『文藝春秋』の表紙に阪倉宜暢の「御前会議」の絵がカラーで掲載されていたことが、今回分かった【fig.10】。迂闊にもこれまで見逃していたのだが、「読本・戦後十年史」を特集した臨時増刊号である<sup>135</sup>。1945年8月10日に皇居の地下防空壕で開かれ、ポツダム宣言受諾を決めた御前会議の様子が、天皇を中心に描かれている。『マッカーサー元帥レポート』に掲載された寺内萬治郎の「御前会議」の絵と比較してみると、テーブルを斜めに置く構図や、人物の姿勢、カーテン、テーブルクロスの色柄と色彩など、ぴったり一致する。

だが、少し奇妙である。なぜなら、床に敷かれた赤い絨毯が途中までしか彩色されておらず、ましてや、天皇が座る机のテーブルクロスは一部分だけしか模様が描かれず、背景の屏風の金色も塗られていない。絵が二つに切断され、画面右側が裏表紙に回されているため、天皇は表紙表面に載せられているものの、右端に位置しており、中心は、左側に列席した幕僚たちのようにすら見える。「御聖断を仰いだ」と言われる鈴木貫太郎や陸軍関係者は裏表紙に回され、室内の壁もほとんど彩色されていない。もしかしたら、編集部在意図があったのかもしれないが、この表紙では、天皇は中心には位置せず、主人公は海軍の幕僚たちである。

さて、同『文藝春秋』には、寺内萬治郎の「表紙絵について」という手記も掲載されている。わずか1頁ではあるが、寺内が『マッカーサー元帥レポート』の「御前会議」の絵を描くことになった経緯や、その前に阪倉宜暢がどのように絵画「御前会議」の準備に取り組んでいたかがよくわかる。寺内によれば、「確か二十二

<sup>134</sup> 前掲、丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」p.266.

<sup>135</sup> 『文藝春秋：読本・戦後十年史』文藝春秋臨時増刊、33(8)、文藝春秋新社、1955年4月。

年の春」にGHQに依頼されて御前会議の絵を描くことになったが、最初はその使途も極秘で教えられなかったという。そして、『文藝春秋』（読本・戦後十年史）の表紙絵は、寺内の描いた「終戦御前会議」の下絵であり、阪倉が「苦心して資料を蒐集し、殆ど当時の光景をそのままに復原してくれたもの」だった。寺内が阪倉から聞いた話として、御前会議の開かれた宮城内の防空壕をスケッチし、列席者にできるだけ個人的に会ってスケッチしたこと、会議で使用した机やテーブルクロスがわからず苦勞したことなどの制作の苦勞話が綴られている。

では、どうして、阪倉の「御前会議」の絵が『文藝春秋』に掲載されたのだろうか？ 編集部はどうして阪倉の絵の存在を知っていたのか？ 阪倉や寺内と編集部とのやり取りや関連資料は残されていないのか？ 阪倉の表紙絵はどこにあるのか？—などの疑問が次々と湧いてくる。思いつくままに『文藝春秋』の現在の編集部の田中光子氏に尋ねたところ、残念ながら関連資料は残されておらず、原画のありかもわからないとのことだった。だが、この号は、全社あげて編集し28万5千部も刷ったことや、文藝春秋の三十五年史では、この「読本・戦後十年史」がベストセラーになって、そのあと、戦後回顧ものを次々と出版するようになったと書かれていることなど、貴重な情報をご教示いただいた<sup>136</sup>。

この『文藝春秋』の臨時増刊号が出てから10年後の1965年8月10日、今度は、『毎日新聞』に奇妙な記事が登場した【fig.11】<sup>137</sup>。アメリカに渡ったままだと言われていた寺内萬治郎の「終戦御前会議の絵」が、日本に帰っていた、というのである。しかも記事の出た2年前に商用で渡米した渡辺護（30、会社取締役）が、ニューヨークであるアメリカ人重役の家に招かれたとき、「急に思い立ったかのように」この絵を贈られたという。そのあとに記されている、寺内がこの絵を描いた経緯は、『文藝春秋』の手記よりも詳しいが、ほぼ内容は同じである。

宮内庁から御前会議のテーブル掛けの布地を取りよせたという証言は、実は御前会議の絵を描いた阪倉宜暢や寺内萬治郎自身が同様のことを語っているのだから、事実だったのだろう。この『毎日新聞』の記事が重要なのは、それらの謎に満ちた「終戦御前会議の絵」の里帰りや描かれた経緯について語っていることだけではない。敗戦からちょうど20年目を迎える節目の1965年8月15日を目前にして、「御前会議」の表象をめぐるせめぎ合いがあったのではないかと推測されるからである。すでに拙文（2008年）で論じたので詳述は避けるが、1965年8月8日、御前会議の開かれた防空壕が初めて記者たちに公開され、それを伝える記事の中で、別の画家・白川一郎が御前会議の絵画を制作中であることをわざわざ告げ、その後白川の絵画が公的な記録画として喧伝されていくようになるのである。

なぜ、1963年に「終戦御前会議の絵」が日本に帰ってきたのか？ なぜ、その時に公表せず、2年後の65年でなければならなかったのか？ アメリカから持ち帰った渡辺護とはいったい何者なのか？ これらの疑問はまだ未解明のままである。阪倉宜暢の「御前会議」の下絵については、2007年に阪倉の作品を画商として取り扱っていた名古屋市内の葵美術で聞き取り調査を行ったとき、仙台の画廊が下絵を保管していると聞いたが、確認は取れなかった。また、1955年に『文藝春秋』が表紙にこの絵を使用していることから、日本国内に存在する可能性は高い。だが、1963年に米国から国内に帰ってきているはずの寺内萬治郎の「御前会議」の行方については全く手がかりがないままである。おそらくそれらの解明のためには、日米の二国間の枠組みからだけでなく、占領期の越境的な極秘活動の様相を解明することが必要になるはずである<sup>138</sup>。

松本清張が日本の再軍備計画に関心を持ち「黒い霧」に迫るなかで出会った荒木光子と、私が御前会議の絵画を探す過程で出会った荒木光子。両者は全く異なるアプローチだったが、政治と美術の交差点には共通部分が多かったのではないかと。執筆の叶わなかった最後の作品を夢想する。

<sup>136</sup> 2019年8月、田中光子氏とのメールでのやり取り。田中氏からは、『文藝春秋三十五年史稿』（文藝春秋新社、1959年、p.169）や『文藝春秋七十年史』（文藝春秋、1991年、p.201）などに掲載されている関連情報をご教示いただいた。

また、1969年に出版された『写真図説帝国連合艦隊—日本海軍100年史』（千早正隆他編、講談社、p.320.）には、この阪倉宜暢の「終戦御前会議の下絵」が掲載されていることも教えていただいた。キャプションに「この下絵をもとにして寺内萬治郎が画いた原画は、米国に持ち去られて日本にはない」とあるが、出版時（1969年）には米国から日本に戻ってきたことがすでに報道されており、これも不思議である。さらに、『写真図説帝国連合艦隊』の絵は、彩色の程度が『文藝春秋』と程度が異なる【fig.12】。千早正隆が阪倉の絵画に何らかの形で関わっていた可能性がある。

<sup>137</sup> 「終戦御前会議の絵—米国から日本に帰っていた」『毎日新聞』1965年8月10日朝刊。

<sup>138</sup> たとえば、そのような視点の仕事に、テッサ・モーリス＝スズキ「民主主義の境界は隙だらけ—スパイ活動、密輸などで形成された日本の貫戦期レジーム」『Intelligence インテリジェンス』vol.16 2016年。

## 図版

fig.1 日本軍の軍事地図  
*Reports of General MacArthur, vol.2-1*



fig.2 岩崎久弥の家族（旧岩崎邸）







fig. 4 G-2 歴史課のアメリカ側スタッフ  
1949年12月9日撮影、Prange Papers、メリーランド大学所蔵



(前列：左端フォレスト、中央プランゲ、右端カワカミ)

fig. 5 G-2 歴史課の日本人スタッフ  
メリーランド大学所蔵



(中央が荒木光太郎)

fig.6 G-2 歴史課の日本人関係者

1950年4月撮影、東京・目黒雅叙園 Prange Papers、メリーランド大学所蔵



▲ 同じ宴会場で芸者有の写真

左の写真、

後列左から：倉？、小松演、曲寿郎、浦津中尉、太田庄次、千早正隆、フランク・中村、大前敏一、藤原岩市、原四郎、田中兼五郎、谷内守男  
前列左から：加登川幸太郎、大井篤、中村勝平、河辺虎四郎、ジーンズ大尉、荒木光太郎、有末精三、服部卓四郎

fig.7 阪倉宜暢<前線に向ふ補給縦列> と 写真「マリベレスの街を前進してバタンに迫る我が小行李隊の弾薬補給」  
『マッカーサー元帥レポート』

写真「マリベレスの街を前進してバタンに迫る我が小行李隊の弾薬補給」  
『大東亜写真戦記』

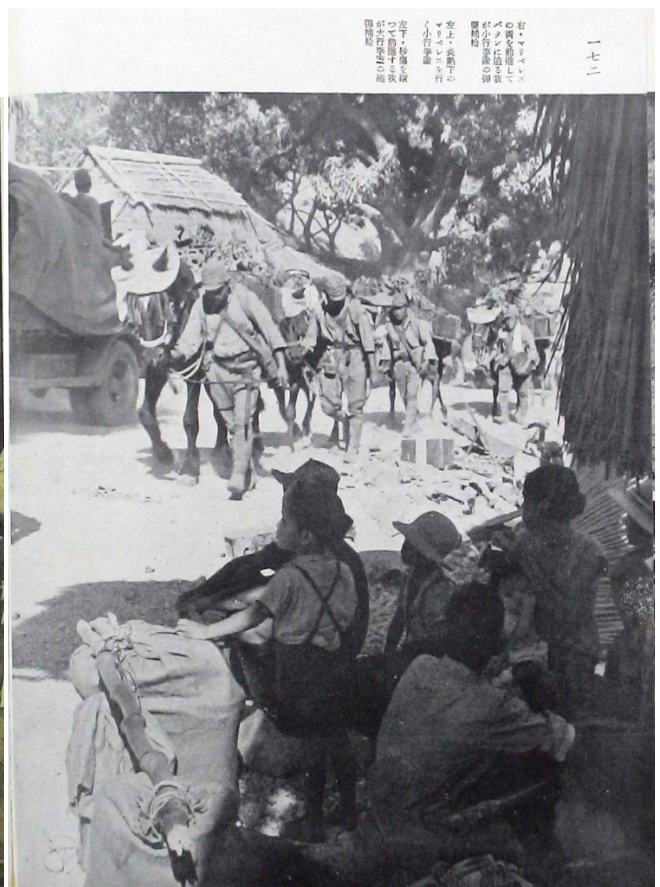


fig.8  
 本間秀岳《山本五十六肖像》1943年  
 アメリカ国立海軍資料館所蔵  
 2018年9月6日、筆者撮影



fig.9  
 パシフィック・ハウス・ジャパン時代の荒木光子  
 『実業之日本』1958年5月15日



fig.10 雑誌『文藝春秋』の表紙に掲載された、阪倉宜暢の「御前会議」下絵  
 『文藝春秋：讀本・戦後十年史』臨時増刊、33(8) 1955年4月



fig.11 「終戦御前会議の絵、米国から日本に帰っていた」  
『毎日新聞』1965年8月10日



fig.12 阪倉宜暢の「御前会議」下絵  
千早正隆他編『写真図説帝国連合艦隊』講談社、1969



資料 I

■1947年12月19日 G-2 戦史編纂 第2巻担当 日本人名簿

“G2 Historical Section Roster of Japanese Nationals working on Volume II” (“G-2 Staff”)

以下は、メリーランド大学が所蔵するアーカイブス「Gordon W. Prange Papers」(ホーンベイク図書館) から、2018年9月調査で発見した文書である。

U G-2 Historical Section  
Volume II, SWPA Series

19 December

Roster of Japanese Nationals working on Volume II:

NAME	FORMER POSITION
✓ 1. ARAKI, Mitsutaro, Mr.	Professor at Imp. Univ.
✓ 2. ARAKI, Mrs.	
✓ 3. ARISUE, Seizo, Mr.	Lt Gen
✓ 4. CHIHAYA, Masataka, Mr.	Commander
✓ 5. FUJIWARA, Iwaichi, Mr.	Lt Col
✓ 6. HARA, Shiro, Mr.	Lt Col
✓ 7. HATTORI, Takushiro, Mr.	Colonel
✓ 8. INAGAWA, Sumiko, Miss	
✓ 9. KATOGAWA, Kotaro, Mr.	Lt Col
✓ 10. KAWABE, Torashiro, Mr.	Lt Gen
✓ 11. KOIZUMI, Kazuko, Miss	
✓ 12. KOMATSU, Hiroshi, Mr.	Major
✓ 13. MAGARI, Toshiro, Mr.	Major
✓ 14. NAKAMURA, Katsuhei, Mr.	R. Admiral
✓ 15. OHMAE, Toshikazu, Mr.	Captain, (Navy)
✓ 16. OI, Atsushi, Mr.	Captain, (Navy)
✓ 17. OHTA, Shoji, Mr.	Lt. Col
✓ 18. SUGITA, Ichiji, Mr.	Colonel
✓ 19. TANAKA, Kengoro, Mr.	Lt Col
✓ 20. TANIUCHI, Morio Mr.	Sgt. Maj.

◀ 1 枚目

2 枚目 (続き)

NAMES OF JAPANESE NATIONALS IN G-2 HISTORICAL SECTION

PRODUCTION (Draftsmen):		LIBRARY:
Y. Aoyagi	H. Oikawa	Nakamura, Michiaki
H. Enori	T. Ozawa	Sawada, Sumi
A. Hojo	T. Sako	Shimada, Kazuyoshi
M. Iida	H. Sakuragi	Suzuki, Yukihisa
M. Ito	T. Sato	Uyama, Kuniko
K. Iwamoto	M. Sawai	Ogawa, Tomoko
B. Kameyama	M. Takashina	Shinozaki, Nakako
T. Kojoma	R. Takeuchi	Sugimoto, Teruo (FN)
E. Matsui	S. Wada	
I. Nakazawa	Y. Tejima	

VOLUME II, SWPA Series:

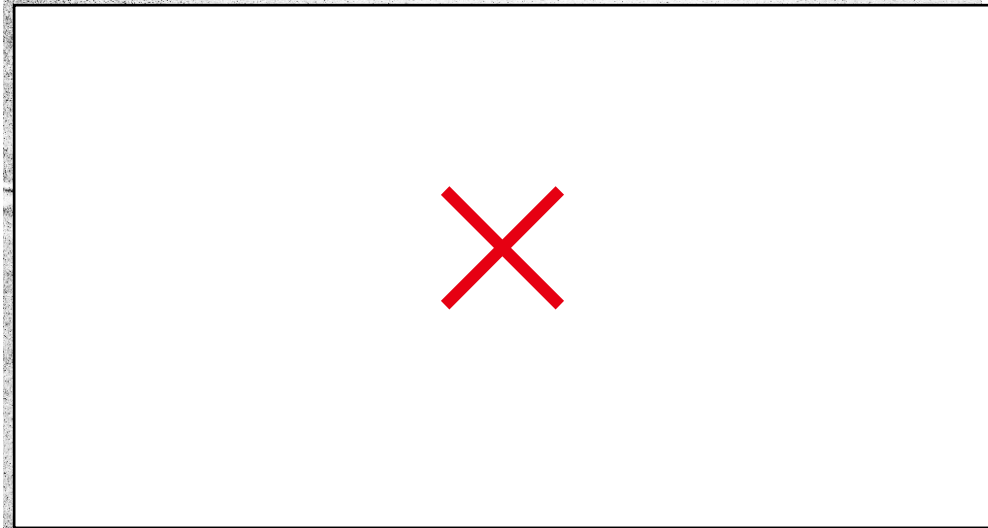
Araki, Mr. Mitsutaro	Miss Kazuko Koizumi
Mrs. Araki	Mr. Hiroshi Komatsu
Mr. Seizo Arisue	Mr. Toshiro Magari
Mr. Masataka Chihaya	Mr. Katsuhei Nakamura
Mr. Iwaichi Fujiwara	Mr. Toshikazu Ohmae
Mr. Shiro Hara	Mr. Atsushi Oi
Mr. Takushiro	Mr. Shoji Ohta
Miss Sumiko Inagawa	Mr. Ichiji Sugita
Mr. Kotaro Katogawa	Mr. Kengoro Tanaka
Mr. Torashiro Kawabe	Mr. Morio Taniuchi

## 資料Ⅱ

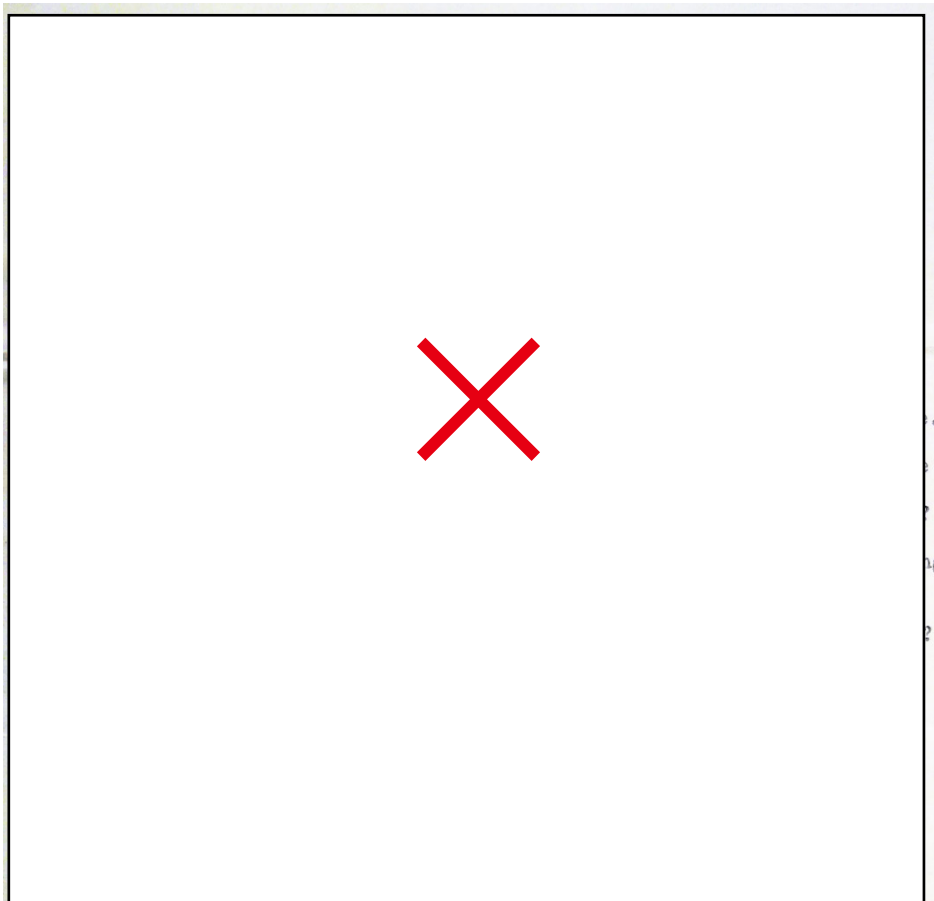
### ■プランゲ宛、荒木光子の手紙、6通

以下は、メリーランド大学が所蔵するアーカイブス「Gordon W. Prange Papers」（ホーンベイク図書館）から、2018年1月調査で発見した手紙である。

- (1) 1948年頃か、日付なし。署名は Mitsuko Araki  
内容：今日午後プランゲに依頼していた買物のキャンセル



- (2) 1948年頃か、「月曜朝」。署名は Mitsuko Araki  
内容：緊急の用事があるので、今日か明日、会いたい。ランチか夕食、ビールでも？電話をください。



(3) 1949年.月(鉛筆で後から日付記入)。署名は、Mitsuko A

内容：Reports of General MacArthur の編纂で生じている問題について助言や意見。  
最後に秘密の手紙なので破るよう指示。



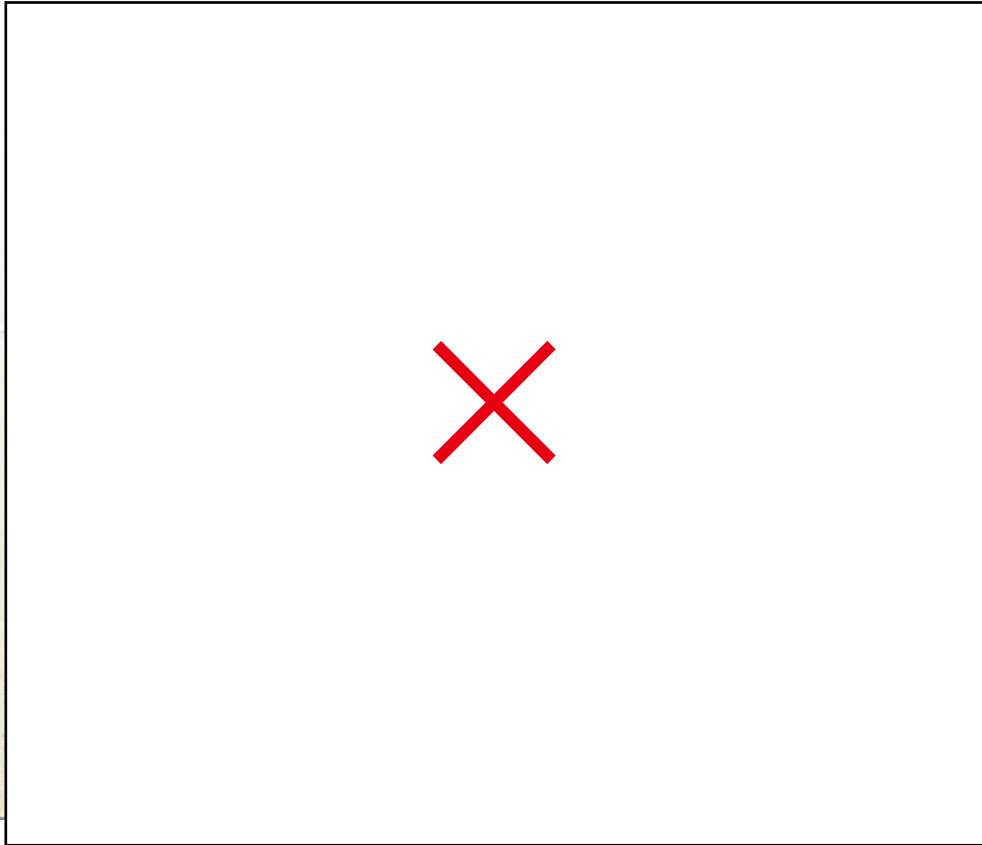


(4) 1950年 - 月 28日付、手書き、署名は、M.Araki  
内容：大井の章に問題あるので提案する。



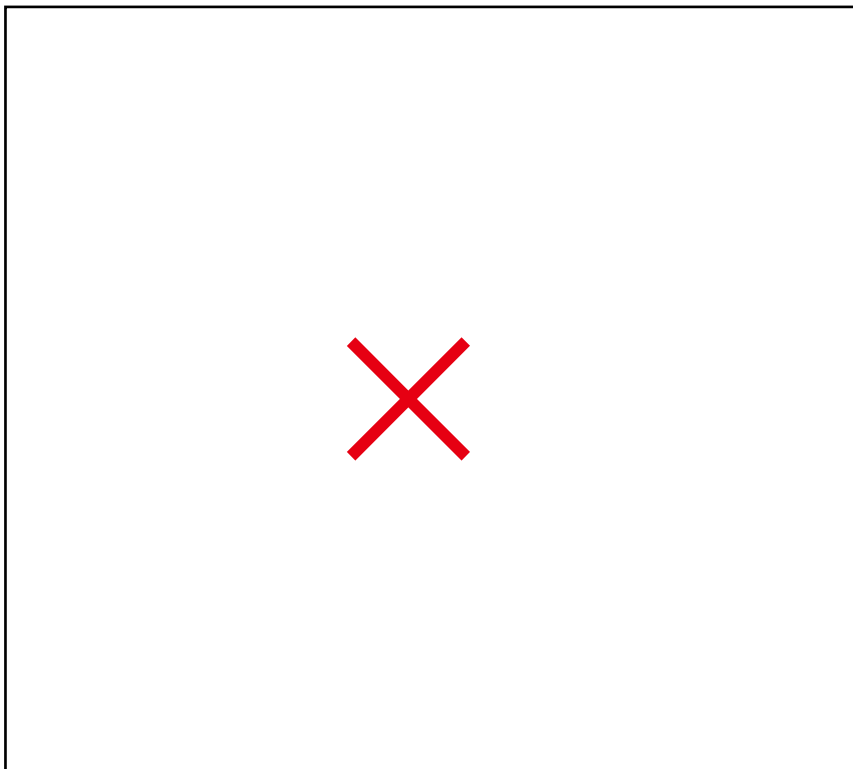
(5) 1950年11月1日付。署名は、M.Araki

内容：Reports of General MacArthur 編纂での問題について。8E は難しいので、自分が日本人編纂グループをなだめる。解決策を提案。



(6) 1949年6月頃か

内容：戦史編纂室を去るプランゲに、感謝とお別れの言葉。広重のコレクションを贈る。



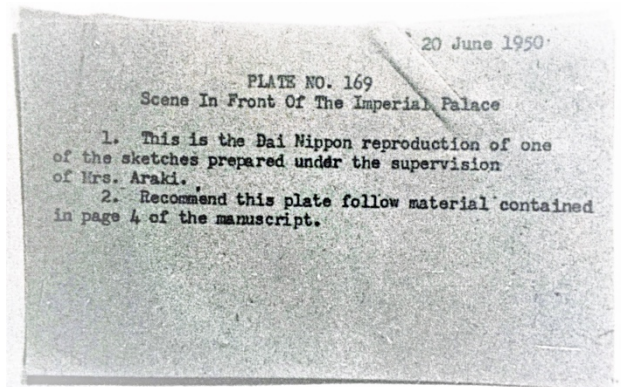
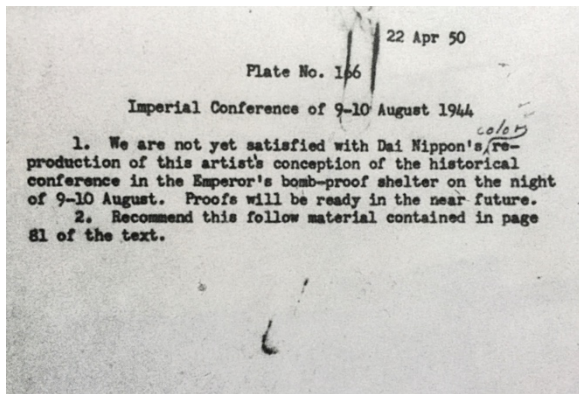
M.Araki をトップに  
日本側編纂グループ連名  
河辺虎四郎・陸軍中将  
有末精三・陸軍中将  
服部卓四郎・陸軍大佐  
大前敏一・海軍大佐  
杉田一次・陸軍大佐  
大田庄次・陸軍大尉  
藤原岩市・陸軍中佐  
原四郎・陸軍中佐  
田中兼五郎・陸軍中佐

### 資料Ⅲ

#### ■ *Reports of General MacArthur* 編纂資料文書 (ROM175) : 荒木光子の指示メモ

下記の資料は、国会図書館憲政資料室の所蔵する「マッカーサー元帥レポート関係文書」(GHQ/FEC, Military History Section, The Reports of General MacArthur) 所収のうち、①原稿・編纂資料文書の一部である。憲政資料室の本資料は、元は、米国国立公文書館でマイクロフィルムに撮影し、作成したマイクロフィッシュを1993年度に受け入れたもの。

これらは、日本の戦争画掲載のページに付けられた編集側の指示メモであり、図版に関しては、荒木光子 (Mrs.Araki) の監督 (supervision) のもとに編集が進められていると明確に書かれている。



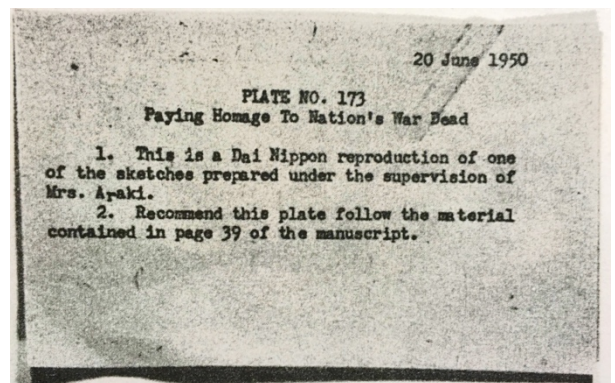
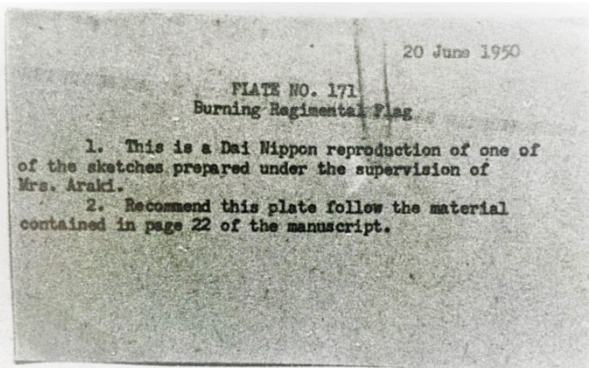
▲ 「御前会議」の図版に添えられたメモ

1950年4月22日付の指示「まだ大日本印刷のカラー図版に満足していない」とある



▲ 「宮城前広場」の図版に添えられたメモ

1950年6月20日付「これは、荒木夫人の監督の下で準備されたスケッチの複製のひとつである」とある



▲ 「軍旗奉焼式」の図版に添えられたメモ

1950年6月20日付「これは、荒木夫人の監督の下で準備されたスケッチの複製のひとつである」とある



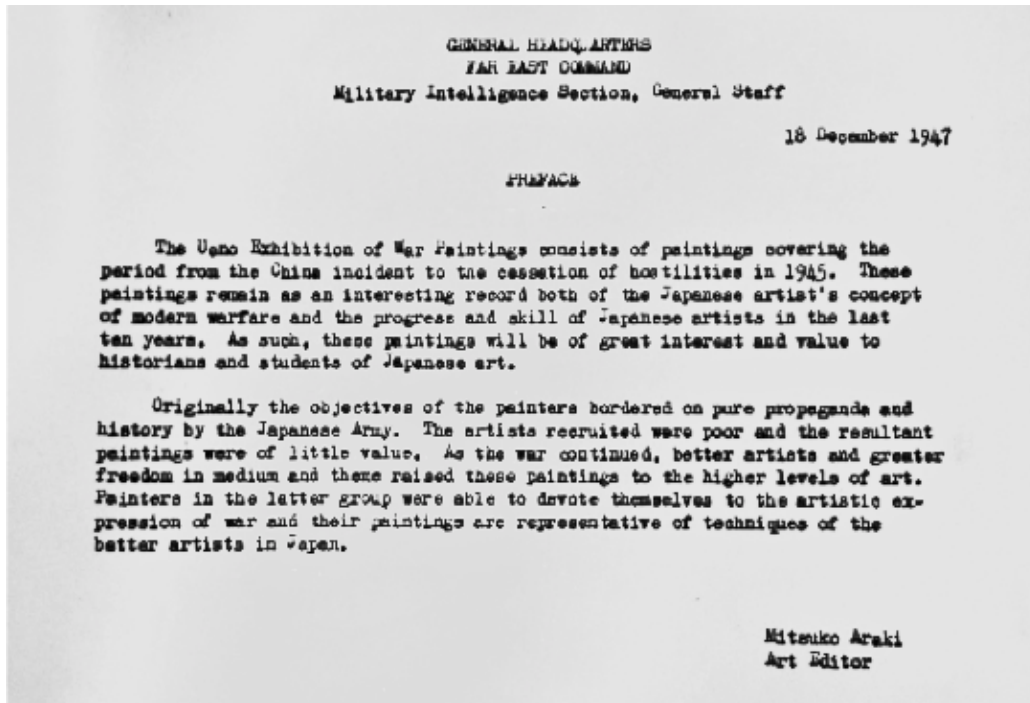
▲ 「靖国社頭英霊に詫ぶ」の図版に添えられたメモ

1950年6月20日付「これは、荒木夫人の監督の下で準備されたスケッチの複製のひとつである」とある

資料IV

■ Collection of Japanese War Paintings 序文 (1947年12月18日付)

以下の文書は、米国国立公文書館 (NARAII) が所蔵するアルバム、Collection of Japanese War Paintings の最初のページに掲載された「序文」である。極東軍総司令部 軍事情報部 一般幕僚 (General Headquarters Far East Command, Military Intelligence Section, General Staff) が、1946年夏、上野・東京都美術館で占領軍関係者に公開した戦時中の日本の戦争画について、批評した文章である。日付は、1947年12月18日、荒木光子(アート・エディター) の名前で書かれている。

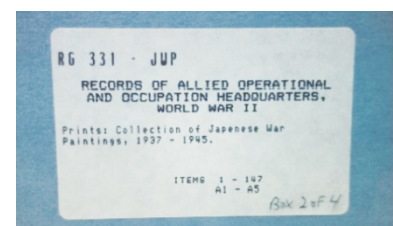
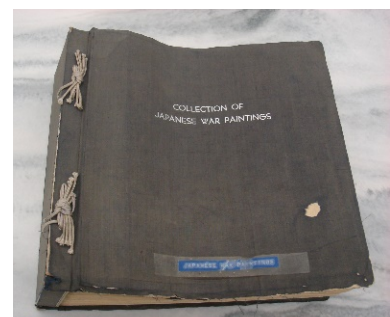


▼ アルバム所収の戦争画リスト (1頁目)。手書きの書き込みがあり、これを元に *Reports of General MacArthur* に入れる戦争画を選定していたことがわかる。リストには、作品タイトル、制作者、作品収集場所、制作年が記載されている。

GENERAL HEADQUARTERS  
UNITED STATES ARMY FORCES, PACIFIC  
Catalog Index of Japanese War Art Paintings  
Ueno Museum, Tokyo, Japan

All photographs of the Paintings made by Signal Corps U.S. Army.

Title of Picture	Name of Artist	Collected At:	Period
1. "Landing Activities of Special Shipping Troops"	Kawabata Minoru	Seoul, Korea	Painted from imagination indefinite period
2. "Japan-Burma Treaty, Signature Ceremony"	Koiso Ryohci	Seoul, Korea	1944
3. "Suicide Unit Bidding Farewell to Their Commander in Jungle" (Guadalcanal)	Tamura Konosuke	Seoul, Korea	1944
4. "Night Attack, Hongkong Fortress"	Ise Masayoshi	Seoul, Korea	1941
5. "Hongkong Surrender: The Meeting of Governor Yang & Gen. Sakai"	Ihara Usaburo	Seoul, Korea	1941
6. "Divine Soldier's Rescue of Indonesian Civilians" (Area: Java)	Fujita Tsuguji	Seoul, Korea	1942
7. "Cannonade of Japanese Forces Near Tenshing"	Yamada Shinichi	Seoul, Korea	1937
8. "Formosans Bidding Farewell to Their Volunteer Soldiers"	Tsuruta Goro	Seoul, Korea	1944
9. "University Graduate Students Preparing to Depart for the "Front" Immediately after Graduation"	Suzuki Mitsuru	Seoul, Korea	1945
10. "Japanese Tank Troop Activities"	Shiraishi Ryuichi	Seoul, Korea	Painted from imagination
11. "Chief of Staff, Chinese National Government, Inspects Their Troops"	Shimizu Toshi	Seoul, Korea	1943
12. "Army & Navy Co-operation, during Landing on Guadalcanal"	Nakamura Ken-ichi	Seoul, Korea	1943
13. "Formosan Unit Fighting through the Owen Stanley Mountains"	Tsuruta Goro	Seoul, Korea	1942
14. "The Bataan Meeting of Gen Wainright and Gen Homma"	Miyamoto Saburo	Seoul, Korea	1942
15. "Landing Operation at Wake Island" (Campaign I)	Matsusaka Yasu	Navy Museum	1941
16. "Air Raid on Nanking"	Tanabe Itaru	Navy Museum	1937
17. "Wanshan Anchorage" (Area: South China)	Nakamura Ken-ichi	Navy Museum	1938



▲ Collection of Japanese War Paintings, 1947  
NNARAII では、コピーを含めて同じアルバムを4冊所蔵。

資料V

■ *Collection of Japanese War Paintings* に掲載されなかった小磯良平のスケッチ  
 今回の調査では、米国立公文書館 NARAII に所蔵される *Collection of Japanese War Paintings* の一冊から、小磯良平のスケッチの刷り見本が発見された。*Reports of General MacArthur* に載せることを最後まで執着していたようであるが、結局掲載されなかった。小磯は戦後、GHQ の要請に応じて、戦時中の『大東亜写真戦記』の写真を元に、描いたと推測される。



▲ 《ネグロス島の攻撃》(Assault on Negros Island) とのタイトル、「昭和二十三年三月十七日」の日付等が付された小磯のスケッチ刷り見本

▼ Box 3/4 のアルバムには、小磯のスケッチを各色で印刷した色見本7枚が挟み込まれていた



▲ 左の小磯の絵の元になったと推測される写真「ネグロス島進撃」

▼上の写真が掲載された『大東亜写真戦記』 大本営陸軍報道部 1943



マッカーサー元帥レポートに掲載された「戦争画」(1)

■Japanese Operations in the Southwest Pacific Area, Vol.II - PartI

(Plate 総数 86 図中、25 枚、ポスター除く)

\*東京国立近代美術館所蔵の作品には、東近美での作品名・制作年をつけた

\*マッカーサー元帥レポートでの制作年は、「昭和〇〇年」を「S.〇〇」のように略記した

図版番号 3	制作者	岩田専太郎
	タイトル	戦友
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ Transparency
	英語タイトル	Resting Comrades
	東近美での作品名・制作年	小休止・1944
	出品展	陸軍美術展・1944



図版番号 7	制作者	小磯亮平 [小磯良平]
	タイトル	行軍途上の日本軍部隊
	制作年(記載ママ)	S.12
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ Transparency
	英語タイトル	Japanese Column on the March
	東近美での作品名・制作年	娘子関を征く・1941
	出品展	2回聖戦美術展・1941
備考	*第1回芸術院賞受賞	



図版番号 14	制作者	藤田嗣治
	タイトル	一九四一年十二月八日 の真珠湾 (日本時間)(写真取材)
	制作年(記載ママ)	S.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Pearl Harbor on 8 December 1941 (Tokyo Time)
	東近美での作品名・ 制作年	十二月八日の真珠湾・1942
	出品展	1回大東亜戦争美術展・1942



図版番号 19	制作者	佐藤 [佐藤敬]
	タイトル	クラークフィールドの空襲
	制作年(記載ママ)	S.16.12.8
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ transparency
	英語タイトル	Air Raid on Clark Field
	東近美での作品名・制作年	クラークフィールド攻撃 ・1942
	出品展	1回大東亜戦争美術展・1942



図版番号 23	制作者	三輪晃勢
	タイトル	キャビテ軍港攻撃
	制作年(記載ママ)	S.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ なし
	英語タイトル	Attack on Cavite Naval Base
	東近美での作品名・制作年	キャビテ軍港攻撃・1942
	出品展	1回大東亜戦争美術展・1942



図版番号 25	制作者	阪倉宜陽 [阪倉宜暢]
	タイトル	前線に向ふ補給縦列
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Supply Train Marching Toward the Front



図版番号 28	制作者	猪熊弦一郎
	タイトル	硝煙の道 (コレヒドール)
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Gun Smoke Road, Corregidor
	出品展	1回大東亜戦争美術展・1942
	備考	*現在所在不明



図版番号 29	制作者	宮本三郎
	タイトル	本間ウエンライト会見図
	制作年(記載ママ)	S.19
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ transparency
	英語タイトル	Bataan Meeting of General Wainwright and Gen Homma
	東近美での作品名・制作年	本間、ウエンライト会見図 ・1944
	出品展	2回陸軍美術展・1944



図版番号 31	制作者	中村研一
	タイトル	日本軍の上陸戦闘
	制作年(記載ママ)	S.19.2
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Japanese Landing Operations
	東近美での作品名・制作年	コタ・バル ・1942
	出品展	1回大東亜戦争美術展 ・1942
備考	*S. 18年度朝日文化賞	



図版番号 34	制作者	伊原宇三郎
	タイトル	オーエンスタンレー山脈 に於ける軍隊の苦難
	制作年(記載ママ)	<b>S.23.3.17</b>
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ <b>original</b>
	英語タイトル	Hardships of the Troops in the Owen Stanleys



図版番号 36	制作者	中村研一
	タイトル	ガダルカナル島に於ける 陸海軍の協同
	制作年(記載ママ)	S.19.1.1
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ なし
	英語タイトル	Army-Navy Cooperation on Guadalcanal
	東近美での作品名・制作年	タサファロング・1944
	出品展	2回陸軍美術展・1944





図版番号 40	制作者	鶴田五郎[鶴田吾郎]
	タイトル	スタンレー山脈の 高砂義勇隊
	制作年(記載ママ)	S.19.2
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ transparency
	英語タイトル	Takasago Unit Fighting Through Owen Stanleys
	東近美での作品名・制作年	スタンレー山脈の 高砂義勇隊・1944
出品展	2回陸軍美術展・1944	



図版番号 41	制作者	小早川篤四郎
	タイトル	オーエンスタンレー 山脈よりポートモレ スビーを望む
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Looking at Port Moresby from Owen Stanleys



図版番号 44	制作者	藤田嗣治
	タイトル	ニューギニアに於ける 安田部隊の最期
	制作年(記載ママ)	S.18.1.1
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Fate of Yasuda Force on New Guinea Front
	東近美での作品名・制作年	〇〇部隊の死闘—ニュー ギニア戦線・1943
	出品展	2回大東亜戦争美術展 ・1943



図版番号 48	制作者	石川寅治
	タイトル	南太平洋海戦
	制作年(記載ママ)	S.19
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ transparency
	英語タイトル	Sea Battle in South Pacific
	東近美での作品名・制作年	南太平洋海戦・1944
出品展	戦時特別文展海軍省特 別出品・1944	



図版番号 49	制作者	田村孝之介
	タイトル	佐野部隊長還らざる大野 挺身隊と訣別す
	制作年(記載ママ)	S.19
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ transparency
	英語タイトル	Suicide Unit Bidding Farewell to Commanding General Sano
	東近美での作品名・制作年	佐野部隊長還らざる大野 挺身隊と訣別す・1944
出品展	2回陸軍美術展・1944	



図版番号 50	制作者	寺内萬治郎
	タイトル	働く軍隊(南方戦区)
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
英語タイトル	Troops at Works, Southern Area	



図版番号 54	制作者	小早川篤四郎
	タイトル	潜水艦による孤島への 糧食補給
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
英語タイトル	Navy Supplying Army Personnel by Submarine	



図版番号 65	制作者	清水登之
	タイトル	日本工兵の活躍
	制作年(記載ママ)	S.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ なし
	英語タイトル	Japanese Engineer Activities in South Pacific
	東近美での作品名・制作年	工兵隊架橋作業・1944 頃
出品展	戦時特別文展陸軍省特別出品 ・1944	



図版番号 68	制作者	佐藤敬
	タイトル	密林の死闘 (ニューギニア戦線)
	制作年(記載ママ)	S.18.11
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Deadly Jungle Fighting : New Guinea Front
	東近美での作品名・制作年	ニューギニア戦線 —密林の死闘・1943
	出品展	2回大東亜戦争美術展 ・1943



図版番号 72	制作者	橋本八百二
	タイトル	サイパン島大津部隊の奮戦
	制作年(記載ママ)	S.19
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Fierce Fighting of Otsu Unit in Saipan
	東近美での作品名・制作年	サイパン島大津部隊の奮戦 ・1944頃
	出品展	戦争記録画展・1945



図版番号 73	制作者	小磯良平
	タイトル	塹壕内の参謀
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Japanese Staff Conference : West Cave, Biak



図版番号 77	制作者	寺内萬次郎
	タイトル	荷揚作業 (フィリピン戦区)
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Unloading Operations, Philippine Area



図版番号 78	制作者	藤本東一郎 [藤本東一良]
	タイトル	駆潜艇の活躍
	制作年(記載ママ)	S.18
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Subchaser in Action
	東近美での作品名・制作年	駆潜艇の活躍・1943
	出品展	2回大東亜戦争美術展 ・1943



図版番号 86	制作者	石川寅治
	タイトル	颱風中の海洋爆撃 (支那海)
	制作年(記載ママ)	S.16
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ なし
	英語タイトル	Transoceanic Air Raid During Typhoon
	東近美での作品名・制作年	渡洋爆撃・1941
	出品展	5回海洋美術展・1941



マッカーサー元帥レポートに掲載された「戦争画」(2)

■ Japanese Operations in the Southwest Pacific Area, Vol. II - Part II

(Plate 総数 172 図中、15 枚、ポスター除く)

図版番号 98	制作者	栗原信
	タイトル	輸送部隊霧の中を進む
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Transport Division Proceeding Trough Fog



図版番号 99	制作者	宮本三郎
	タイトル	歩兵機関銃隊の前進
	制作年(記載ママ)	S.23.3.17
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Advancing Infantry Machine Gun Unit



図版番号 112	制作者	伊藤悌三
	タイトル	対戦車肉迫攻撃 (リンガエン)
	制作年(記載ママ)	S.20
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ なし
	英語タイトル	Antitank Suicide Unit, Lingayen Gulf
	東近美での作品名・制作年	玉城挺身斬込五勇士奮戦 ・1944
	出品展	戦争記録画展・1945



図版番号 124	制作者	碓伊之助
	タイトル	皇軍輜重兵隊の活躍
	制作年(記載ママ)	S.14
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Japanese Ammunition Train in Action
	東近美での作品名・制作年	臨安攻略・1941 頃
	出品展	2回聖戦美術展・1941



図版番号 127	制作者	栗原信
	タイトル	山岳地帯の退却
	制作年(記載ママ)	S.19
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Film/ なし
	英語タイトル	Retreat in the Mountains
	東近美での作品名・制作年	怒江作戦・1944
	出品展	2回陸軍美術展 ・1944



図版番号 137	制作者	藤田嗣治
	タイトル	レイテ島に於ける 薫空挺隊の奮戦
	制作年(記載ママ)	S.20
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Airborne Raiding Unit on Leyte
	東近美での作品名・制作年	薫空挺隊敵陣に強行着陸 奮戦す・1945
	出品展	戦争記録画展・1945



図版番号 138	制作者	岩田専太郎
	タイトル	特攻隊（空）内地基地を進発
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ transparency
	英語タイトル	Departure of Special- attack Unit from Homeland Base
	東近美での作品名・制作年	特攻隊内地基地を進発す (二)・1945
	出品展	戦争記録画展・1945



図版番号 140	制作者	福澤一郎
	タイトル	特攻舟艇敵艦に突入
	制作年(記載ママ)	S.20
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Surface Raiding Unit Dares Desperate Ramming
	東近美での作品名・制作年	船舶兵基地出発・1945



図版番号 145	制作者	鈴木誠
	タイトル	民防空陣の活躍
	制作年(記載ママ)	S.20 初春
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Civilian Air Raid Defense Activity: Women Fire-Fighters
	東近美での作品名・制作年	皇土防衛の軍民防空陣 ・1945
	出品展	戦争記録画展・1945



図版番号 150	制作者	栗原信
	タイトル	防空壕
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Air Raid Shelter
	備考	*校正で荒木光子の 指示メモ



図版番号 152	制作者	向井潤吉
	タイトル	相模湾を俯瞰せる側防砲陣地
	制作年(記載ママ)	S.23.3
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Flanking Gun Emplacement Overlooking Sagami Bay
	備考	*校正で荒木光子の指示メモ



図版番号 165	制作者	寺内萬治郎
	タイトル	御前会議
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ なし
	英語タイトル	Imperial Conference of 9- 10 August 1945
	備考	*1950年4月22日、御前会議のグラにメモ「大日本印刷の色に我々は満足していない」



図版番号 166	制作者	寺内萬治郎
	タイトル	靖国社頭英霊に詫ぶ
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Paying Homage to Nation's War Dead, Yasukuni Shrine
	備考	*校正で荒木光子の指示メモ



図版番号 168	制作者	寺内萬治郎
	タイトル	なし
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Scene in Front of Imperial Palace
	備考	*校正で荒木光子の指示メモ



図版番号 170	制作者	向井潤吉
	タイトル	軍旗奉焼式
	制作年(記載ママ)	なし
	原資料/ Reproduction Material/ draft & Layout Material	Paint/ Copper plate/ original
	英語タイトル	Burning Regimental Flag
	備考	*校正で荒木光子の指示メモ



■マッカーサー元帥レポートの編纂過程では掲載候補であったと考えられる「戦争画」

制作者	小磯良平
タイトル	ネグロス島の攻撃
資料番号	Paint 331-NH-2-177
英語タイトル	Assault on Negros Island
備考	*アルバム Collection of Japanese War Paintingsに 色見本が挟み込み (NARAII)



制作者	鶴田吾郎
タイトル	神兵パレンバンに降下す
資料番号	Paint 331-MH-2-178
英語タイトル	Japanese Paratroop Descending on Palembang
東近美での作品名 ・制作年	神兵パレンバンに降下す ・1942
出品展	1回大東亜戦争美術展 ・1942



制作者	吉岡堅二
タイトル	爪哇カリジャティ西方 飛行場西方地区の爆撃
資料番号	Paint 331-MH-2-179
英語タイトル	Bombing West Area of Karijati Airfield, Java
東近美での作品名 ・制作年	カリジャティ西方の爆撃 ・1942
出品展	1回大東亜戦争美術展 ・1942





## ■ 荒木光子・荒木光太郎年譜

作成・北原恵

年	年齢 (光子)	荒木光子の歩み (1902—1986)	荒木光太郎の歩み (1894-1951) 及び社会の動き
1894 明治 27			・5月18日、荒木光太郎、荒木十畝 (1872-1944) の長男として誕生。
1902 明治 35 (寅)	0	・光子、荘清次郎の五女として誕生。父・清次郎 (1862-1926) は、三菱合資専務理事。姉は福島繁太郎 (美術評論家) の妻・福島慶子 (1900-1983)。光子の兄の荘清彦 (1894-1967 のち三菱商事社長) は、荒木光太郎と東京高等師範学校附属中学校の同窓生。	
1910's	10代	・絵を習いに荒木家に入出入り ・モダンガールとして話題	・第一高等学校第一部甲類を卒業 ・東京帝国大学法科大学入学 ・1916年、卒業後大学院進学。
1919	17	・麴町精華女学校卒業	・東京帝国大学農学部助教授に
1921	19	・光太郎と結婚。仲人は青木菊雄 (1917年時点で三菱合資会社総務部専務理事)。	・光子と結婚
1923 ~26	21~ 24	・夫に同行し英独仏米へ。ウィーン社交界で注目集める。	・ヨーロッパ (英独仏米) に留学。 イギリス：ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスでE.キャナン、ケンブリッジ大学でケインズの講義を聴講。1924年からウィーンへ：オーストリア学派の経済学者やシュンペーターと知己に。 ・帰路、米国へ。
1927	25		・東京帝国大学農科大学 (東京大学農学部) 教授に就任。
1931	29		・ウィーン留学中の知己、シュンペーターが来日、1月26日、荒木宅を訪問。
1935	33		・経済学部教授に移籍 (1941まで農学部教授兼務)。助手に、崎村茂樹 (ストックホルム亡命事件)
1937	35		・日本主義経済学唱える (土方成美、本位田祥男、荒木光太郎、田辺忠男、中西寅雄)
1938	36	・9月、荒木光子「盡きぬ思ひ出」(沢田美喜子編『澄子』甘露寺方房 (非売品)) が出版。 ・10月2日、神戸から「靖国丸」で、7月に出発した夫より遅れてドイツへ。 河合栄治郎が神戸まで見送りに。「靖国丸」には、野上弥生子夫妻、駐独満州国公使・呂宣文、在独満州国公使館参事官・江原綱一、建築家・谷口吉郎、宝塚少女楽団「訪独伊芸術使節団」らも乗船。 ・ドイツでは大島浩 (ドイツ大使) と知り合う。	・5月、戦時経済研究会、設立。 ・7月、日独交換教授として渡独。ベルリン日本研究所代表を務める。ナチス期の日独文化交流に大きな役割を果たす。

年	年齢 (光子)	荒木光子の歩み (1902—1986)	荒木光太郎の歩み (1894-1951) 及び社会の動き
1939	37	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月20日、ヒトラー総統50歳祝賀記念観兵式および茶会（ベルリン）に出席。</li> <li>・8月31日、神戸に帰国。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月、オーストリア・キッツビュールで第1回独日学徒大学開催。</li> <li>・4月20日、ヒトラー総統50歳祝賀記念観兵式および茶会に参加（大島浩駐独大使、白鳥敏夫駐イタリア大使、有末精三在イタリア日本大使館駐在武官も参加）。</li> <li>・6月、ファシスト女子青年スポーツ大会（於・イタリア）に日本側代表として列席。</li> <li>・8月31日、神戸に帰国。</li> </ul>
1940	38	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツから帰国後、ドイツ大使館に出入りし、中日イタリア大使シャシント・アウリッチ、駐日ドイツ大使オイゲン・オットーと親しくなる。東條英機陸軍大臣とも面識、妻・勝子とは昵懇になる。</li> <li>・12月、荒木光子「簡素の美しさ」（『婦人の生活』）出版。</li> <li>・12月10日、「日独伊婦人会」創立：東條勝子・星野操と共に代表委員に（電話は荒木方）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・財団法人日独文化協会の常任理事・評議員。</li> <li>・東大評議員メンバーに</li> <li>・9月27日、日独伊三国同盟締結</li> </ul>
1941	39	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月、荒木光子「獨逸の印象」（河合栄治郎編『學生と西洋』）出版</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツ学士院会員賞</li> <li>・ゾルゲ事件</li> </ul>
1942	40	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月27日、日独伊婦人会は、大日本婦人会共同主催にて、日独伊同盟成立二周年記念会開催</li> </ul>	
1943	41	<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月30日、ドイツ大使館に、日独伊婦人会が大使夫人主催の茶会に招待される（東條勝子、星野操、白鳥君子、荒木光子以下120名出席）</li> </ul>	
1944	42		<ul style="list-style-type: none"> <li>・経済学振興会、設立</li> </ul>
1945	43		<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月、東京大学経済学部を辞職（大内兵衛復職）</li> </ul>
1946	44	<ul style="list-style-type: none"> <li>2月初旬、檜橋渡・内閣書記官長官邸での、民生局スタッフらとのパーティに参加。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月、日本商工会議所専務理事</li> <li>・8月21日-9月2日、日本の戦争画が、上野・東京都美術館で占領軍関係者に公開。</li> <li>・秋、マッカーサーの戦史編纂をG-3からG-2へ。</li> </ul>
1947	45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏頃、光子はGHQ参謀第二部（G2）、戦史編纂日本側スタッフに。</li> <li>・12月18日、極東軍総司令部・軍事情報部による戦争画アルバム <i>Collection of Japanese War Paintings</i> に序文“preface”を書く。（“General Headquarters Far East Command Military Intelligence Section, General Staff” Art Editorの肩書）</li> <li>・1948～1950、光子はプランゲと親密に（“Gordon W. Prange Papers”にプランゲ宛・光子の手紙）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏頃、光太郎はGHQ参謀第二部（G2）、戦史編纂日本側チーフエディターに。</li> </ul>

年	年齢 (光子)	荒木光子の歩み (1902—1986)	荒木光太郎の歩み (1894-1951) 社会の動き
1948	46	・5月、荒木邸で開いた武道の演武にウィロビーらを招待。光子、服部をウィロビーに推薦。娘・明子も出席。	
1950	48	・春、一人娘・明子が、斎藤鎮男・外務省情報課長と結婚。 ・ <i>Reports of General MacArthur</i> の戦争画図版の校正作業。(「マッカーサー元帥レポート関係文書」(原稿編纂文書)に指示のメモ) ・12月、 <i>Reports</i> の編纂終了。	
1951	49	・7月22日、ウィロビーが光子と服部卓四郎をリッジウェイに手紙で売り込むが、却下される。	・4月11日、マッカーサー解任。 ・ウィロビー退任・帰国。 ・1951年8月9日、G-2廃止 ・9月29日、肝臓がんのため、自宅で死去(57歳)。自宅は、世田谷区玉川瀬田町三八六。告別式は10月2日。(日本商工会議所専務理事の肩書)
1952	50	・光子所有の「故荒木光太郎蔵書」を近畿大学に有償譲渡。3月3日、近畿大学総長世耕弘一と契約。(洋書1389部、和書単行本1541冊、和雑誌36点1876冊を譲渡)	
1954	52	・春頃、名古屋大学に図書寄贈(無償譲渡)。寄贈仲介者の名大経済学部助教授、城島国弘は、光太郎の弟子で光子とも懇意。	
1954 ～55頃	52～ 53	渡米	
1956	54	・4月12日、「パシフィック・ハウス・ジャパン」(Pacific House Japan Ltd.)設立。社長は川田義彦(第一物産出身)、主要メンバーは、ウィリアム・シュラーガー(元米海軍将校、ハーバード大学建築学科卒)、デール・ケラー(ワシントン大学インテリアデザイン卒)、光子。日本橋丸善ビルの4階。	
1958	56	・5月、光子の活躍が雑誌で紹介。(『実業之日本』1958年5月15日号)	
1963	61	・10月、パシフィック・ハウス・ジャパン解散。大倉ホテル竣工直後、シュラーガーが米で死去	
1964	62		・4月5日、マッカーサー死去
1965	63	・1月6日、プランゲによるインタビューで、ゾルゲについて語る。	
1966	64		・ <i>Reports of General MacArthur</i> 出版(米国政府印刷庁)
1986	84	・6月5日、死去(フランチェスカ)。多磨霊園に夫と共に眠る。	

## ■荒木光子関係 主要参考文献一覧

### ■全般（戦争画関係含む）

- ・阿羅健一『秘録・日本国防軍クーデター計画』講談社、2013年
- ・荒木光子「盡きぬ思ひ出」 沢田美喜子編『澄子』甘露寺方房（非売品）、1938年
- ・荒木光子「簡素の美しさ」 『婦人の生活』第1冊、生活社、1940年12月
- ・荒木光子「ドイツの印象」河合栄治郎編『學生と西洋』日本評論社、1941年
- ・有賀美智子「回想録 GHQ の人びと（1-3）」『公正取引』352（2月）、353（3月）、355（5月）1980年
- ・有末精三『有末機関長の手記：終戦秘史』芙蓉書房、1976年
- ・有末精三、大井篤、児島襄「内側から見たG2<戦後史座談会>」 『朝日ジャーナル』18(18)、1976年7月号
- ・板垣進助『この自由党！後編：祖国なき政治』理論社、1952年
- ・市川房枝・婦人問題研究所編『婦人界の動向』文松堂出版、1944年  
[復刻版]『近代婦人問題名著選集：社会問題編』第12巻、日本図書センター、1983年
- ・ウイロビー、C.A.、平塚栞緒編『GHQ知られざる謀報戦：新版・ウイロビー回顧録』山川出版社、2011年
- ・片山勢津子、橋田由美子「第二次大戦後の日本のインテリアデザイン事務所：パシフィック・ハウス・ジャパンとミルドレッド・ワーダー」『生活造形』45号、京都女子大学生生活造形学教室 [編]、2000年3月
- ・片山勢津子「パシフィック・ハウス・ジャパンとミルドレッド・ワーダー：第二次世界大戦後の日本のインテリアデザイン事務所」 『デザイン学研究』（研究発表大会概要集）、47号、2000年
- ・加藤哲郎『ゾルゲ事件：覆された神話』平凡社新書、2014年
- ・河合栄治郎編『學生と西洋』日本評論社、1941年
- ・河合栄治郎『河合栄治郎全集』第18巻、社会思想社、1968年
- ・河田明久『「戦争記録画」に関する三つのリスト：対照表および解題』『鹿島美術研究』年報第15号別冊、鹿島美術財団、1998年
- ・河田明久「それらをどうすればよいのか：米国公文書にみる「戦争記録画」 接收の経緯」『近代画説』（明治美術学会誌）第8号、1999年
- ・北原恵「消えた三枚の絵画—戦中/戦後の天皇の表象」『岩波講座：アジア太平洋戦争—戦争の政治学』倉沢愛子他編、岩波書店、2005年
- ・北原恵「≪御前会議≫の表象—『マッカーサー元帥レポート』と戦争画」『甲南大学紀要』vol.151、2008年
- ・木村勝美『子爵夫人鳥尾鶴代：GHQを動かした女』立風書房、1992年
- ・楠貴美子「占領下に躍った女子学習院グループ—ロさがなき十二歳の国たみ」『改造』33巻第6号、1952年増刊号
- ・久保木彰一「翻刻『荒木寛敏翁自伝』(1)(2)(3)」『MUSEUM(東京国立博物館研究誌)』no.412, 414, 417, 1985年
- ・国立国会図書館①「マッカーサー元帥レポート関係文書」②同図版集
- ・五島勉『東京の貞操』青春出版社、1958年  
[復刻]『性暴力問題資料集成』第16巻、不二出版、2006年
- ・斎藤鎮男『外交—私の体験と教訓』サイマル出版会、1991年
- ・阪倉宜暢『阪倉宜暢作品集（1・2）』六藝書房、1991年
- ・阪倉宜暢『阪倉宜暢水彩画集』六藝書房、1997年
- ・迫水久常『大日本帝国最後の四か月』（河出文庫）河出書房新社、2015年 [初出1973年]
- ・佐藤元英、黒澤文貴「解説」『GHQ歴史課陳述録：終戦史資料』（上下）佐藤・黒澤編、原書房、2002年
- ・柴山太「朝鮮戦争の文脈における米英にとっての日本再軍備の意味変化：1950年6月～1952年8月」  
『同志社アメリカ研究』（37）、同志社大学アメリカ研究所、2001年
- ・週刊新潮編集部『マッカーサーの日本（下）』新潮文庫、1983年
- ・白川一郎「「最後の御前会議」を再現する」 『文芸春秋』47(13) 1969年12月号
- ・鈴木武『怒涛の中の太陽』技報堂、1969年
- ・袖井林二郎・福島鑄郎編『マッカーサー：記録・戦後日本の原点』日本放送協会、1982年
- ・大本営陸軍報道部・監修『大東亜写真戦記』誠文堂新光社、1943年
- ・竹前栄治・天川晃『日本占領秘史（上下）』朝日新聞社、1977年
- ・竹前栄治『GHQの人びと：経歴と政策』明石書店、2002年
- ・田中宏巳『消されたマッカーサーの戦い：日本人に刷り込まれた<太平洋戦争史>』吉川弘文館、2014年
- ・谷口吉郎『雪あかり日記』東京出版、1947年

- ・ Tan, Vincent Louie, 「占領下日本における戦争記録画没収と移送の事情」『デザイン理論』56号、意匠学会、2010年
- ・ 千早正隆他編『写真図説帝国連合艦隊：日本海軍100年史』講談社、1969年/改訂新版1983年
- ・ 辻政信『潜行三千里』毎日新聞社、1965年〔初出1950年〕
- ・ 土屋礼子解説・白水祥太郎訳「資料紹介：GHQ参謀第2部略史 第2章GHQ/SWPA軍事諜報部」『Intelligence』12巻、2012年
- ・ 土屋礼子「占領軍G-2歴史課と旧日本軍人グループ」『Intelligence』16巻、2016年
- ・ 鶴田吾郎「マッカーサー元帥のポーズ」『太平洋戦争名画集（続）』ノーベル書房、1968年
- ・ 鶴田吾郎『半世紀の素描』中央公論美術出版、1981年
- ・ 寺内萬治郎「表紙絵について」『文藝春秋』（臨時増刊「読本・戦後十年史」）文藝春秋社、1955年4月（表紙は阪倉宜暢「御前会議」）
- ・ 寺内萬治郎他『太平洋戦争名画集（正）』ノーベル書房、1967年
- ・ 東京大学経済学部編『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会、1976年
- ・ 留井重平「室内装飾デザインで活躍する荒木光子さん」（趣味を生かして活躍する二人の未亡人の話）『実業の日本』61(10)、1958年5月15日
- ・ 内務省警保局外事課『外事月報：昭和18年12月分』〔復刻〕『外事月報』第10巻、不二出版、1994年
- ・ 新名丈夫「占領時代の政界秘話」『歴史読本』25(10)、320、1980年8月
- ・ 野上彌生子『野上彌生子全集』（日記）第Ⅱ期、第6巻、岩波書店、1987年
- ・ 野上彌生子『野上彌生子全集』（日記）第Ⅱ期、第17巻-2、岩波書店、1990年
- ・ 平瀬礼太「戦争画とアメリカ」『姫路市立美術館研究紀要』第3号、1999年
- ・ 平瀬礼太「戦争画とアメリカ 補遺」『姫路市立美術館研究紀要』第5号、2001年
- ・ ブレア、クレイ JR（大前正臣訳）『マッカーサー』パンフィカ、1978年
- ・ 『文藝春秋：讀本・戦後十年史』文藝春秋臨時増刊、33(8)、文藝春秋新社、1955年4月
- ・ 文藝春秋編集部「松本清張 最後のテーマは辻政信(特別企画 秘話開封)」『文藝春秋』80(11)、2002年9月
- ・ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営陸軍部<9>』朝雲新聞社、1975年
- ・ 牧野邦昭、小堀聡他『荒木光太郎文書解説目録：増補改訂版』名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター情報資料室、2018年
- ・ 松本清張「占領『鹿鳴館』の女たち」『婦人公論』1960年11月号
- ・ 松本清張『日本の黒い霧』（松本清張全集）文藝春秋、1972年
- ・ 丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」『中央公論』1952年5月
- ・ 宮本陽一郎「戦争記録画の失われた歴史を求めて」『世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館：平成26年度 展覧会・講座室活動報告書』世田谷美術館、2015年
- ・ 村上英子『障子がカーテンに変わったころ：昭和のインテリア』かもす出版、2015年
- ・ 守川正道『ダグラス・マッカーサー』三和書房、1978年
- ・ 八木紀一郎、柳田芳伸編『埋もれし近代日本の経済学者たち』昭和堂、2018年
- ・ ワイルズ、ハリー・エマソン・ワイルズ『東京旋風：これが占領軍だった』1954
- ・ 「C.A.T.旅客案内所/パシフィック・ハウス」『国際建築』第24巻 第12号、1957年
- ・ *Reports of General MacArthur, prepared by his General Staff* [Editor in chief, Charles A. Willoughby, 1966. For sale by the Superintendent of Documents, U.S. Govt. [復刻]GHQ参謀第2部編集『マッカーサーレポート』全4巻、現代史料出版、1998年米国の陸軍戦史センター (Web)全文公開 Website: Reports of General MacArthur by the Department of the Army
- ・ Forrest, Jerome and Kawakami, Clarke H. Kawakami, "General MacArthur and His Vanishing War History", *The Reporter*, Oct. 14 1952, New York.
- ・ Far East Command General Headquarters, *Brief History of the G-2 Section, GHQ, SWPA and Affiliated Units* (Part 1): Introduction to the Intelligence Series, 1948. Web 公開

## ■新聞記事

- ・ 「童心の“三国同盟” 枢軸推進へ婦人連も新発足」『読売新聞』1940年12月11日夕刊
- ・ 「多摩川園の端午の節句 ニコニコ東条夫人 日独伊少年少女の交歓会」『読売新聞』1942年5月6日夕刊
- ・ 「皇居の防空壕 初公開—ここで“終戦御前会議”」『朝日新聞』1965年8月9日朝刊
- ・ 「終戦後前会議の絵—米国から日本に帰っていた」『毎日新聞』1965年8月10日朝刊

第 20 回 松本清張研究奨励事業研究報告書  
発行日 令和 2 年 (2020) 3 月 31 日発行

[編集・発行]

北九州市松本清張記念館  
北九州市小倉北区城内 2 - 3  
電話 (093) 582-2761

[印刷・製作]

有限会社シーズ

本報告書記載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。  
松本清張記念館ホームページ <https://www.seicho-mm.jp/>  
登録番号 北九州市印刷物登録番号 第 1909153 F